

2026年度 視能訓練士学科

# 授 業 概 要

学校法人 昌賢学園  
群馬医療福祉大学附属医療福祉専門学校

視能訓練士学科 開講科目

区分		科 目	単位	種類	年次	
基礎分野	科学的思考の基盤	哲学	2	講義	1年	
		論理学	2	講義	1年	
		倫理学	2	講義	1年	
	人間と生活	体育実技	1	演習	1年	
	社会の理解	人間関係論(コミュニケーション)	2	講義	1年	
		情報処理	1	演習	1年	
		英語	1	演習	1年	
		医療情報管理	1	講義	1年	
専門基礎分野	人体の構造と機能及び心身の発達	基礎医学Ⅰ	2	講義	1年	
		基礎医学Ⅱ	2	講義	1年	
		人間発達学(成長・発達と老化)	2	講義	1年	
		保育学	2	講義	1年	
	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	臨床医学	2	講義	1年	
		臨床心理学	2	講義	1年	
		精神保健学	1	講義	1年	
		障害の理解	1	講義	1年	
		視能学概論(神経眼科基礎)	1	講義	1年	
	視覚機能の基礎と検査機器	視器の解剖学	2	講義	1年	
		視覚生理学Ⅰ(分解能,空間感覚,視野,色覚,光覚)	2	講義	1年	
		視能検査学総論	2	講義	1年	
		視覚情報処理学(神経系含む)	2	講義	1年	
	保健医療福祉と視能障害のリハビリテーションの理念	公衆衛生	2	講義	1年	
	基礎視能矯正学	基礎視能矯正学	基礎視能矯正学Ⅰ	2	講義	1年
			基礎視能矯正学Ⅱ	2	講義	1年
生理光学Ⅰ			2	講義	1年	
生理光学Ⅱ			2	講義	1年	
屈折矯正学Ⅰ			2	講義	1年	
視能検査学		生理光学Ⅰ【演習】	1	演習	1年	
		視能検査学Ⅰ	2	講義	1年	
視能訓練学		視覚リハビリテーション	2	講義	1年	
臨地実習		実習指導Ⅰ	1	実習	1年	
		臨地実習Ⅰ-1(幼稚園・保育所)	2	実習	1年	
		臨地実習Ⅰ-2(特養・老健・障支)	2	実習	1年	
計			57	単位		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 哲学		授業の種類 講義		授業担当者 鈴木 利定	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・前期	必修・選択 必修		
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)					
<p>[授業の目的・ねらい] 本学園の建学の精神は孔子が述べている「仁」である。そのため、建学の精神の基となっている「仁」を理解することで、人間としての在り方生き方に主体性を以て考えることができる人間を育てることにある。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 人間にいかにいけるべきかという問いについて、人間によるべき新しい「道」をどのように考え、仁と礼について、孔子の説いた礼をもとに現代における礼のあり方を学ぶ。プラトンと同じく孔子は、理想国家を説くことにより政治のあり方を説いた。孔子の説いた政治道徳が現代にあてはまることを学び、人間関係の形成をはじめ、人間の尊厳、他者を支える教養を高め、専門職としての倫理観を身につけ、豊かな人間性を養えるよう学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)] 「人間とは何か」我々はこれまで幾度となくこの問いを繰り返してきた。この問いに『論語』を通して学び、自分自身はどう思うのかを自ら問いかけ、専門職としての倫理観、それを支える教養を高め、地域社会に有為な人間性を身に付けることで、地域に貢献できる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.オリエンテーション(本学で専門職を目指す意義)。</li> <li>2.論語の孝と敬、性善説から信の大切さを学ぶ。</li> <li>3.教育論、礼に反する儀式、射に見る古道について。人権思想の源流と具現化。</li> <li>4.『大学』の道について明德を明らかにする孔子の説明について。</li> <li>5.至善に止まるを積す。</li> <li>6.家を斉へて国を治むるを積す。</li> <li>7.道に対する知者、愚者、賢者、不肖のかかわりから学ぶ。</li> <li>8.顔回が中庸を選び人生に処したことを論ず。</li> <li>9.国に道あるとき無いときに関せず節操を持つべきことを示す。</li> <li>10.孔子が憂いが無いのは文王だけだろうと語った理由から考える。</li> <li>11.民を治めるためには、誠は天の道なるを知るに在るを論ず。</li> <li>12.孔子の思想が「人間中心」であり、「ヒューマニズム」であるといわれているのはなぜか、から考える。</li> <li>13.孟子、荀子の人間観から考える。</li> <li>14.老荘思想においては、人間をどのようにとらえるかについて考える。</li> <li>15.老荘思想と儒教のどちらの人間観により自己の思想を築いていくのかについて考える。</li> </ol>					
<p>[履修に当たっての留意点] 講義中のノート筆記は必須である。平常の授業に対する積極的な姿勢(参加貢献度)で臨み、講義中の質問に対して積極的に回答できるよう努める。グループワーク等以外の私語は他の受講生のことも考慮し厳禁とする。私語の場合に注意を即し、それでも改善されない場合は退学を命ずることもある。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 『成有一徳 昌賢学園の全人教育』—中央法規出版— 『儒教哲学の研究』—明治書院</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 筆記試験(60%)・レポート(20%)・授業取り組み状況(出席状況・参加貢献度(20%)、授業内にて積極的な発言が3回以上)を鑑み評価する。</p>		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 論理学		授業の種類 講義	授業担当者 佐藤 成道
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年後期	必修・選択 必修
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 10年以上、僧侶や社会福祉士などの専門職としての立場から、教育や保育の現場や社会貢献活動に携わっている。</p>			
<p>[授業の目的・ねらい] 医療の専門職として、論理学の基本的な知識を身につけながら、論理的な思考や論理的な表現を学修することで、実社会や専門職としての実務において、それらの必要性や意義を理解し、実際に活用できるようになることを目的とする。</p>			
<p>[授業全体の内容の概要] 論理学の基本的な事柄や意義について学びながら、論理的思考や論理的表現について学修する。そして、それらを実際に活かすための論理的な思考力や文章力などの基本的な能力を身につけるための方法や手段を学び、実際に授業の最後に課題を出題し、文章として表現する作文を書いて評価した上で、これを次回の授業でフィードバックを行いながら知識を定着させ、実践的な能力を身につける。</p>			
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 論理学における基本的な事柄やその意義について説明することができる。</li> <li>2. 実社会や専門職としての実務において、活用できる論理的な思考や文章の読み書きを身につけることができる。</li> <li>3. 「仁」(真心を育て、人の道を行う)という本学の建学の精神を理念として論理学を学修し、論理的な思考力や表現力を身につけるために、社会におけるさまざまな問題や課題に関心を持ちながら、専門職として自らが主体となって対象者が必要とする支援のあり方などを継続的に探求する姿勢を身につけることができる。</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 論理学とは何か？・授業ガイダンス 「なぜ、視能訓練士学科で論理学を学修するのか？」を確認しながら、「論理学という授業は何か？」を考える。 また、授業ガイダンス(授業目的・授業概要・授業計画・授業方法・成績評価などの確認)を行う。</li> <li>2. 論理的とはどのようなことか？ 論理的に思考し、それを表現することの意味や大切さについて考察し、それを表した文章とはどのようなものなのかを学修する。</li> <li>3. 文章の基本とは何か？ 文章で表現する際の基本である文章マナーをはじめ、文体や句読点、原稿用紙の書き方など論理的な文章を作成するにあたり必要となる文の基本的な事柄について学修する。</li> <li>4. なぜ、段落は必要なのか？ 論理的な文章には、中心文と支持文という構成が不可欠である。その際、段落をつけることが大切だが、段落の基本とその役割について学修する。</li> <li>5. なぜ、接続詞は必要なのか？ 文と文、段落と段落などをつなげ、文章を作成する際に重要な接続詞について、その基本や役割、活用について学修する。</li> <li>6. 論点を整理する際に大切なこと(1)―並列と列挙の表現― 論点を並列させたり、列挙したりする際に重要な慣用表現や助詞などを整理しながら学修する。</li> <li>7. 論点を整理する際に大切なこと(2)―抽象度の調節― 文章の創作や整理をする際に抽象度を調節することが重要とされるが、この「抽象度の調節とは何か？」について考察しながら、その意味や役割、方法について学修する。</li> </ol>			

8. 主張や意見を表明する際に必要なこと

主張や意見を表明する際には、根拠や理由が必要であることを学修しながら、主張や意見、根拠の述べ方について考察する。

9. 主張や意見と事実を区別する際に必要なこと

主張や根拠、理由づけとしての論拠の関係性を概説し、論拠の妥当性を開設しながら、それぞれを区別する方法や難しさについて考察する。

10. 引用することの必要性と重要性

文章で表現する際に重要な引用に関して、その必要性やマナーについての意味や方法を解説しながら、情報化社会における引用の意義や注意点について学修する。

11. 要約することの重要性(1)―要約とは何か?―

文章で表現する際に大切な「要約とは何か?」について概説した上で、専門的な実務だけでなく日常生活における要約の重要性について学修する。

12. 要約することの重要性(2)―要約の方法―

要約が重要であることの意味を考察しながら、その具体的な方法や手順について学修する。

13. 文章以外での表現方法

論理的な表現として、文章を作成するという方法以外に、図や表によって表現する意味について概説しながら、その目的や方法について学修する。さらに、その他の表現方法として、敬語についても学修する。

14. 文章作成において大切なこと

文章で表現する際に重要な文章マナーについて、実践的な文章作成において重要となる慣用表現や基本的な事柄の詳細について学修する。

15. まとめと解説

[履修に当たっての留意点]

- ・意欲的な学習態度で「学ぶ意義」を自身に問いかけながら、積極的に授業に出席して、集中して受講すること。
- ・配布資料への穴埋めやメモ書きなど、受講時には必要なことをしっかり書き込むこと。
- ・配布資料とともに、授業後の復習で整理した内容の資料は、ファイルして保管すること。
- ・医療や福祉などをとりまく社会の状況や環境、制度政策などに関する情報に積極的に触れたり、視能訓練士という専門職のあり方について日常的に追求する意識をもったりしながら、それを客観的に分析・考察することに努めること。
- ・予習: 各回の授業におけるキーワードをもとに、書籍や辞書、信頼できるインターネットの情報源などを活用して、不明なことを調べた上で、授業に臨むよう努めること。
- ・復習: 配布資料の内容やそこへの書き込んだことなどをもとにしっかりと復習しながら、授業内でのわからない用語や内容は、辞書や事典、書籍などを活用して調べること。

[使用テキスト・参考文献]

- ・配布するパワーポイントの資料をテキストとして使用する
- ・参考書は、授業時に、必要に応じて適宜指示をする

[単位認定の方法及び基準]

期末試験(70%)、作文(30%)を基本として、総合的に判断する。

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) <b>倫理学</b>		授業の種類 <b>講義</b>	授業担当者 <b>佐藤 成道</b>
授業の回数 <b>15回</b>	時間数(単位数) <b>30時間(2単位)</b>	配当学科・学年・時期 <b>1年前期</b>	必修・選択 <b>必修</b>
実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 10年以上、僧侶や社会福祉士などの専門職としての立場から、教育や保育の現場や社会貢献活動に携わっている。			
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>医療の専門職として、自身の倫理的なあり方を追究するのみならず、対象者が必要とする目標や抱える課題を見出し、解決に向けた支援を適切に行えるように、倫理学の基本的な知識を身につけ、実社会や各分野における専門職との関係性において、倫理が果たす役割や意義について理解し、実践に活かせるようになることを目的とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>倫理学の基本的な事柄や意義について学び、実社会にける対象者の個別性や価値観、主体性や関係性などのあり方について考察する。そのために、倫理学の基本的な事柄やテーマ、思想などを理解し、倫理学における論理的な思考を身につけ、さらには、実践的な倫理を具体的に概説した上で、それらを実際に活かすための視点や考え方を学修する。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 倫理学の基本的な事柄について説明することができる。</li> <li>2. 倫理と医療をはじめ関連する専門職との関係性について、その必要性や意義について説明することができる。</li> <li>3. 「仁」(真心を育て、人の道を行う)という本学の建学の精神を理念として倫理学に関心を持ちながら、専門職としての基本的な倫理を理解し、自身の倫理的なあり方を追究しながら、自らが主体となって対象者が必要とする支援のあり方などを継続的に探求する姿勢を身につけることができる。</li> </ol> <p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. なぜ、倫理学を学修するのか？・授業ガイダンス 「なぜ、視能訓練士学科で倫理学を学修するのか」を確認しながら、倫理学という授業は何かを考える。 また、授業ガイダンス(授業目的・授業概要・授業計画・授業方法・成績評価などの確認)を行う。</li> <li>2. 倫理学、そして倫理とは何か？ 倫理あるいは倫理学の基本的な事柄を学修するにあたって、「倫理」という用語を理解し、倫理学における代表的な概念を例にして考察する。</li> <li>3. 倫理学のテーマ(1)―人間とは何か？― 今回から3回にわたり、倫理学での主な概念について学修する。 今回は、基本的な倫理や人間らしさを倫理的な視点によってとらえ、「人間とは何か？」について考察する。</li> <li>4. 倫理学のテーマ(2)―自己と他者― 私あるいは自己とは何かについて問いながら、「自己と他者」あるいは「自己と他者との関係性」について考察する。</li> <li>5. 倫理学のテーマ(3)―道徳とは何か？― 倫理の基本であり、社会や実生活でも重要な「道徳とは何か？」について考察する。</li> <li>6. 倫理学の思想(1)―世界の宗教と思想― 今回から4回にわたり、倫理について考え実践する上で重要な思想について、宗教を中心に学修する。 今回は、古代ギリシア哲学をはじめ、世界の思想について、代表的な宗教を中心に考察する。</li> <li>7. 倫理学の思想(2)―儒教― 本学は、建学の精神である「仁」(真心を育て、人の道を行う)を理念としているが、実際の社会や生活でも重視されている儒教の思想について考察する。</li> </ol>			

8. 倫理学の思想(3)―仏教①―

今回と次回の2回にわたり、仏教について学修する。  
今回は、古代インドの仏教の思想を中心に考察する。

9. 倫理学の思想(4)―仏教②―

大乘仏教の思想を中心に、日本仏教の各宗派の違いやその思想を学修した上で、日本仏教における社会的な活動や事業について考察する。

10. 生命倫理(1)―いのちとは何か?―

「いのちとは何か」について考察しながら、「生命倫理とは何か?」について学修する。

11. 生命倫理(2)―安楽死とは何か?―

生命倫理において難しい課題といえる安楽死について、「生と死とは何か?」を概説しながら、「安楽死とは何か?」について考察する。

12. 倫理学の実践(1)―環境問題とは何か?―

今回から3回にわたり、実践的な倫理について、身近なこととして考え、実際に活用するために必要な視点や問題の所在、課題などについて学修する。今回は、「環境問題とは何か?」について考察する。

13. 倫理学の実践(2)―幸福とは何か?―

医療や福祉の専門職を目指す学生として、福祉ということを手掛かりに「幸福とは何か?」について考察する。

14. 倫理学の実践(3)―倫理綱領とは何か?―

ビジネスにおける倫理を手掛かりにしながら、現在では組織や専門職などにおいて広く用いられ、視能訓練士においても重要な「倫理綱領とは何か?」について考察する。

15. まとめと解説

[履修に当たっての留意点]

- ・意欲的な学習態度で「学ぶ意義」を自身に問いかけながら、積極的に授業に出席して、集中して受講すること。
- ・配布資料への穴埋めやメモ書きなど、受講時には必要なことをしっかり書き込むこと。
- ・配布資料とともに、授業後の復習で整理した内容の資料は、ファイルして保管すること。
- ・医療や福祉などをとりまく社会の状況や環境、制度政策などに関する情報に積極的に触れたり、視能訓練士という専門職のあり方について日常的に追求する意識をもったりしながら、それを客観的に分析・考察することに努めること。
- ・予習:各回の授業におけるキーワードをもとに、書籍や辞書、信頼できるインターネットの情報源などを活用して、不明なことを調べた上で、授業に臨むよう努めること。
- ・復習:配布資料の内容やそこへの書き込んだことなどをもとにしっかりと復習しながら、授業内でのわからない用語や内容は、辞書や事典、書籍などを活用して調べること。

[使用テキスト・参考文献]

- ・配布するパワーポイントの資料をテキストとして使用する
- ・参考書は、授業時に、必要に応じて適宜指示をする

[単位認定の方法及び基準]

期末試験(80%)、リアクションペーパー(20%)を基本として、総合的に判断する。

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 体育実技		授業の種類 実技		授業担当者 星野 邦彦	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(1単位)	配当学科・学年・時期 1年・前期		必修・選択 必修	
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 高等学校、中学校、小学校での体育授業指導の実務経験をもとに、学生個々の運動能力を把握し、全員が楽しく運動に取り組めるよう工夫をしながら授業を展開していく。					
[授業の目的・ねらい] 健康で心豊かな生活を営むための生涯スポーツの一環として、学生生活の充実を図る。スポーツを通して、正しい方、競い方、技術の高め方などについて理解を深める。また、視能訓練にかかわる学生としてパラスポーツへの理解も深め、実践していく。					
[授業全体の内容の概要] 生涯体育スポーツとして、参加者全員が楽しめるよう、各競技においてルールの工夫やゲーム内容について互いに話し合いの場を設け、学生同士の自主性が育つよう授業を展開していく。					
[授業修了時の達成課題(到達目標)] 健康で豊かな生活を送るためにスポーツを生活の中に取り入れ、スポーツ実践を通じて健康の保持・増進に努めるとともに、周囲の人々と協力してスポーツを楽しむ態度・習慣を身に付ける。					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. オリエンテーション 授業方法 評価方法等についての説明【講義】 2. 参加者全員が楽しめるためのルールの工夫 ソフトバレーボール【実技】 3. ソフトバレーボール チーム対抗戦【実技】 4. 苦手な者も積極的に参加できるルールの工夫 バレーボール【実技】 5. バレーボール チーム対抗戦【実技】 6. 安全面の考慮・工夫 ドッチビー【実技】 7. ルールの工夫 ドッチビー チーム対抗戦【実技】 8. 全員が楽しめるためのゲーム運びの工夫 バドミントン【実技】 9. バドミントン ダブルス チーム対抗戦【実技】 10. バドミントン ダブルス チーム対抗戦【実技】 11. 全員が楽しめるためのゲーム運びの工夫 ゴールボール【実技】 12. 全員が楽しめるためのゲーム運びの工夫 ボッチャ【実技】 13. 全員が楽しめるためのゲーム運びの工夫 フライングディスク【実技】 14. 全員が楽しめるためのゲーム運びの工夫 ユニホック【実技】 15. まとめ【講義】					
[履修に当たっての留意点] 日々の体調管理をしっかりと行う。 運動に適した服装で授業に参加する。					
[使用テキスト・参考文献] 必要に応じて資料等配布			[単位認定の方法及び基準] 出席・活動状況70%、実技試験30%により総合評価をおこなう。		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 人間関係論(コミュニケーション)		授業の種類 講義		授業担当者 江藤 雄哉	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年 前期		必修・選択 必修	
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 介護福祉士、生活相談員としての実務経験から、対人援助におけるコミュニケーションや障害別の支援技術を指導し、視能訓練士としての対人援助、接遇向上につなげる。					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>対人援助においてコミュニケーションは、他者と人間的に関わり合う為には必須のスキルである。視能訓練士としての授業においても同様であり、クライアントの様々な「見え方」に共感し、適切な治療方針を選択する必要がある。またインフォームドコンセントの視点から、クライアントの意思決定やアドボカシーを尊重することも求められる。本教科を学習し、専門的知識、技術と対人援助スキルを習得することを目的とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションの意義 ・コミュニケーション技術(クライアント・家族)</li> <li>・チームマネジメント ・生活支援技術(移動・移乗など)</li> </ul> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クライアントとの支援関係を構築し、意思決定を支援することができる。</li> <li>・クライアントの感覚、運動、認知等の機能に応じたコミュニケーションの技法を選択し、活用できる。</li> <li>・チームマネジメントに関する知識を理解し、活用できる。</li> <li>・様々な障害や高齢者への対応力を習得する。</li> </ul> <p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1.対人援助におけるコミュニケーション①【人間関係におけるコミュニケーションとは何かを理解させる】(導入講義)</li> <li>2.対人援助におけるコミュニケーション②【自己PRを通して自己覚知や多様性の理解、ラポール形成を図る】(演習)</li> <li>3.対人援助におけるコミュニケーション③【テキストに沿ってコミュニケーションの意義、目的、役割を解説する】(講義)</li> <li>4.対人援助におけるコミュニケーション④【コミュニケーションの様々な技法について実例を交えて解説する】(講義)</li> <li>5.対人援助におけるコミュニケーション⑤【ラポール形成や権利擁護に関して解説する】(講義)</li> <li>6.コミュニケーション技術①【話を聞く、感情表現を察する、納得と同意を得る技法などに関して解説する】(講義)</li> <li>7.コミュニケーション技術②【相談、助言、指導の技法としてバイステックの7原則に則して解説する】(講義)</li> <li>8.コミュニケーション技術③【コミュニケーション障害の理解、様々な障害への対応を解説するⅠ】(講義)</li> <li>9.コミュニケーション技術④【コミュニケーション障害の理解、様々な障害への対応を解説するⅡ】(講義)</li> <li>10.コミュニケーション技術⑤【多様なケースに対し、学んだ技法による適切な対人援助を習得させる】(演習)</li> <li>11.チームマネジメント①【対人援助におけるチームアプローチ、情報共有やカンファレンスについて解説する】(講義)</li> <li>12.チームマネジメント②【人材育成、自己研鑽についてOJT・Off-JTに則して解説する】(講義)</li> <li>13.生活支援技術①【生活支援とICFについて解説する】(講義)</li> <li>14.生活支援技術②【障害形態別の移動、移乗について実演により習得させる】(演習)</li> <li>15.まとめと解説【医療従事者としての対人援助について再確認させる】(講義)</li> </ol> <p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>常日頃から相手を尊重する(傾聴)、自身の意見を述べる事ができる(自己覚知)を意識すること。 グループディスカッションにも積極的に参加することで多様性について理解すること。</p> <p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>介護福祉士実務者研修テキスト第3版 2巻「介護Ⅰ」 太田貞司・上原千寿子・白井孝子 編 中央法規出版</p> <p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>出席率2/3(20時間)及び、最終日に実施する修了試験 正答率60%以上で単位認定とする。</p>					

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 情報処理		授業の種類 演習		授業担当者 鈴木 国泰	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(1単位)	配当学年・時期 1年後期		必修・選択 必修	
<p>[実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)]</p> <p>私は、平成20年4月からシステムの導入・運用・管理に携わって参りました。年々、そのシステムは利便性が高くなりアップデートされています。特に学生用メールアドレスが付与され、google work pace を利用できることになったのは大きな転換点でした。様々なサービスを自由に無料で使うことができるため、在籍中のみならず、将来に渡って活用できるように授業の構成をしていきます。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>Google が運用している workspace の種類を把握し、それを必要に応じて活用することができるようになること。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>各自端末を用意し、課題に対して適切なアプリケーションを使用し演習を行う。状況により公開までできること。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>(1) スプレッドシート、ドキュメント、スライドの課題は、作成した課題を提出できること。</p> <p>(2) フォーム、サイトの課題は、作成に加えて公開ができること。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Google work space とは~有料版、無料版の違い (office365 を含む)</li> <li>2. Gmail の機能、役割について</li> <li>3. Google カレンダー機能、他のカレンダーアプリ、連携方法、応用</li> <li>4. Google meet の使い方及び実践。</li> <li>5. Google chat、ドライブ</li> <li>6. Google スプレッドシート (1)</li> <li>7. Google スプレッドシート (2)</li> <li>8. Google ドキュメント (1)</li> <li>9. Google ドキュメント (2)</li> <li>10. Google スライド (1)</li> <li>11. Google スライド (2)</li> <li>12. Google スライド (3)</li> <li>13. Google フォーム 作成と公開</li> <li>14. Google サイト (1) 仕組み、作成</li> <li>15. Google サイト(2)作成、公開</li> </ol>					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>タブレット、ノートパソコンを各自で用意してください。機種は問いません。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>桑名由美『Google Workspace 完全マニュアル』 秀和システム新社、2023年。</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>筆記試験はありません。出席・授業態度・課題・総合的に評価します。</p>		

## 授業概要

授業のタイトル (教科名) 英語		授業の種類 演習		授業担当者 グジェビック マレク	
授業の回数 15	時間数 (単位数) 30 (1 単位)	配当学科・学年・時期 1 年後期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>これまで子どもから大人まで数多くの方に英語を教えてきました。 群馬医療福祉大学においても英語を担当しています。</p>					
<p>〔授業の目的・ねらい〕</p> <p>外国人と日常の様々な状況で、意思を通わせる能力が必要となってきました。仕事、趣味、家族、友達に関して自分が質問をしたり、質問に答えること、さらに外国人に指示を与えたりその理由を説明したりしなくてはいけない状況が生じます。</p> <p>〔授業全体の内容の概要〕</p> <p>基本的な文法、たくさんの会話の練習、発音やイントネーションの練習、さらに英語を母国語とする国の中でいくつかの国の生活や文化についての情報も学びます。</p> <p>〔授業終了時の達成課題 (到達目標)〕</p> <p>学生は基本的な日常生活の範囲内で英語の意思の疎通ができるようになり、さらにその英語での意思疎通の能力を他の人にも教えることができるようになります。</p>					
<p>〔授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Introductions (序論) (自己紹介、会話の練習、ロールプレイング、質問の練習)</li> <li>1. Greetings (あいさつ) (会話の練習、発音の練習)</li> <li>2. Meeting People (人々との会合) (話し合うこと、会話の練習、書く練習)</li> <li>2. Showing Hospitality (もてなし) (申し出をすること、会話の練習)</li> <li>3. Let's Do It! (それをしよう!) (提案や招待をすること、会話の練習)</li> <li>3. Interests and Hobbies (関心事と趣味) (会話の練習、書く練習)</li> <li>4. Going Shopping (買い物をすること) (話し合いや会話の練習、買い物のリストを作る)</li> <li>4. A Visit to the Zoo (動物園へ行ってみる) (現在進行形、ロールプレイング、書く練習)</li> <li>5. Funny, Funnier, the Funniest (の比較級と最上級) (形容詞の変化、話し合ったり会話をする練習)</li> <li>5. Telling the Time (時間を言う) (尋ねる練習、書く練習、会話の練習)</li> <li>6. Time for Lunch (料理と食事について、会話の練習、自分の食べるものを決める)</li> <li>6. You Can Do It (能力について、自分や他の人について話すこと、会話)</li> <li>7. How About a Swim With a Dolphin? (イルカと一緒に泳ぐのはどうですか?) (可能性について話す、ロールプレイング、会話)</li> <li>7. Jobs and Professions (仕事と職業) (繰り返す活動、ロールプレイング、会話の練習)</li> <li>8. More Interesting Than You Think (あなたが思うよりもっと面白い) (形容詞の変化、話し合い、書く練習)</li> <li>8. My New Kitchen (私の新しいキッチン) (場所や家具の描写、モノローグ)</li> <li>9. The Weather (天候) (天候の様子描写、絵を描く、会話)</li> <li>9. Moving Around the Town (町の中を散歩する) (行き方を聞いたり教えたりする)</li> <li>10. What Country Is Japan (金の小島へ旅行する) (田舎の場所、話し合い)</li> <li>10. Going Abroad (外国へ行く) (見物、欲しいものを表現する、会話)</li> </ol>					

- 11. Countries and Nationalities (国と国籍) (話したり書いたりする練習、絵をかいてみる)
- 11. A Trip to Egypt (エジプトへの旅) (観光名所、会話の練習)
- 12. Just a Week Ago (ちょうど一週間前) (過去の経験、会話の練習、書く練習)
- 12. Traveling to the Treasure Island (ゲーム; 過去形)
- 13. An Accident (事故) (過去の不規則動詞、書く練習と読む練習)
- 13. Natural Disasters (自然災害) (特別な助動詞、話し合い、ロールプレイング)
- 14. When a Big One Strikes (特別な助動詞、会話、書く練習)
- 14. Have You Ever Tried One? (今までにやったことがありますか?) (現在完了形、ロールプレイング)
- 15. How Long? Since When? (どのくらい長く? いつからずっと?) (現在完了進行形、会話の練習)
- 15. General Review of Verbs and Auxiliary Verbs Usage (動詞と助動詞の使い方の全体的な復習) (会話の練習)

〔履修に当たっての留意点〕

授業に出席し参加すること。授業の準備をすること。指示のあったように発音の練習をすること。

〔使用テキスト・参考文献〕

*How Are You Doing? - A Short Course of English for Children and Adults*; Marek Grzebyk, 2025 (子供と大人のための英語の短いレッスン)  
 テキストは自分で準備します。

〔単位認定の方法及び基準〕

試験 (70%) と授業への参加 (30%)

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 医療情報管理		授業の種類 講義		授業担当者 清水祥友	
授業の回数 8回	時間数(単位数) 15時間(1単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期	必修・選択 必修		
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)					
<p>専門学校において医療事務講師を23年務め、その傍ら医療秘書教育全国協議会主催の医療秘書技能検定試験において作問委員および学術研修委員会諮問委員を務めている。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい] 視能訓練士として必要な医療制度の理解と診療報酬請求業務の基礎的知識を習得し、診療費の計算技能を身につけることを目的とする。また、医療情報の管理や守秘義務に関する倫理的理解を深め、医療現場での実務に対応できる力を養う。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要] 視能訓練士が関わる医療提供体制や診療情報の取り扱い、医療保障制度の仕組みについて講義形式で学ぶ。後半では、代表的な眼科疾患を題材に診療費の計算演習を行い、診療報酬請求業務の実践力を養う。最終回には確認テストを実施し、理解度を評価する。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視能訓練士の役割と医療提供体制について理解し、関連施設の機能を説明できる。</li> <li>2. 診療情報の管理と守秘義務、医療保障制度・保険制度の基本的な仕組みを理解し、制度の違いを説明できる。</li> <li>3. 診療報酬請求業務の流れを理解し、代表的な眼科疾患における診療費の計算と適切な算定ができる。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(授業の進め方)、視能訓練士が関係する医療提供施設について〔講義〕</li> <li>2. 診療情報の記載方法、保存と活用、守秘義務、電子カルテについて〔講義〕</li> <li>3. 医療保障制度、医療保険の種類、医療保険の給付〔講義〕</li> <li>4. 医療費のしくみと診療報酬請求業務について〔講義〕</li> <li>5. 診療費の計算(1):結膜炎、睫毛乱生等の症例〔演習〕</li> <li>6. 診療費の計算(2):霰粒腫、屈折、角膜異物、麦粒腫等の症例〔演習〕</li> <li>7. 診療費の計算(3):白内障・角膜混濁、角膜裂傷等の症例〔演習〕</li> <li>8. まとめ 確認テスト</li> </ol> <p>※授業の進行状況により前後することがある。</p>					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回授業以外にリアクションペーパーもしくはこれに代わるものの提出を求めるほか、適宜課題が出されるので、必ず実施のこと(評価に算入する)。</li> <li>・資料(A4またはA3)を配布するので、2穴ファイル等整理できるものを用意すること。</li> <li>・演習の際に電卓を使用するので、事前に準備しておくこと(スマートフォンは不可。大きめのボタンのものが望ましい)</li> </ul>					
<p>[使用テキスト・参考文献] 清水祥友『医療事務100問100答 2026年版』医学通信社 他配布資料</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・確認テスト(70%)</li> <li>・提出物(30%)</li> </ul>		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) <b>基礎医学 I</b>	授業の種類 <b>講義</b>	授業担当者 <b>山浦あゆみ</b>
授業の回数 <b>15回</b>	時間数(単位数) <b>30時間(2単位)</b>	配当学科・学年・時期 <b>1年 前期</b>
		必修・選択 <b>必修</b>
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 看護師、看護教員、介護教員の資格を有している教員が、臨床経験と教育経験を活かして講義し、実務経験に基づいた視点で授業を展開することで、学生が医療現場で即戦力となるための理解と態度形成を促す。視能訓練士を目指す学生に必要な人体の構造と機能について教授する。基礎医学で学習する内容はとても膨大であり、初めて習うことも多く、まとめて理解することは非常に困難なので、わかりやすく講義をしていく。		
[授業の目的・ねらい] 人体の構造と機能を系統的に理解し、視能訓練士として必要となる基礎医学的知識を習得する。特に視覚機能と関連の深い神経系・感覚器系を中心に、全身の解剖生理を統合的に学ぶ。		
[授業全体の内容の概要] 本授業では、視能訓練士として必要な全身の解剖学的構造と生理的機能について理解を深める。眼の構造を除いた感覚器(鼻・口腔・皮膚)や、睡眠、心のしくみ、死の理解なども含め、身体と心の統合的な視点を養う。からだの構造については、人体模型を使用しながら、正確かつ具体的なイメージを確立する。人体の正常構造(解剖学)と機能(生理学)を学修する。視能療法学に関わる幅広い基礎領域と専門領域に関する深い知識を修得する。呼吸器系、消化器系、運動器系、循環器系、血液、免疫系、神経系、感覚器系について、器官系毎に人体の正常な構造と機能について概説する。 視能訓練士にとって重要な視覚器と平衡聴覚器、脳について、その構造と機能を把握できるようにする。 人体解剖生理学の知識は、医療に携わる者にとって最も基本的な学問であるため、細胞・組織・器官の階層性の観点から人体の正常な形態と構造、機能と役割を系統的に学び、臨床実践に必要な人体の知識を身につける。		
[授業修了時の達成課題(到達目標)] 到達目標 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人体を構成する細胞・組織・器官・器官系の基本構造と機能を説明できる。</li> <li>・ 各器官系(神経・循環・呼吸・内分泌・運動・感覚など)の解剖生理を説明できる。</li> <li>・ 視覚機能と関連する神経系・感覚器系の基礎を説明できる。</li> <li>・ 発達段階における心身の変化の基本を説明できる。</li> <li>・ 視能訓練士として必要な基礎医学的知識の臨床応用の基盤を説明できる。</li> <li>・ 感覚器の基本的な構造と働きを理解できる。</li> <li>・ 心のしくみ(記憶・適応機制)を生理的観点から説明できる。</li> <li>・ 睡眠と死に関する生理的変化を理解し、医療者としての配慮を考えられる。</li> </ul>		
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 <b>【前期】視覚システムの解剖生理(視能訓練士の核となる分野)</b> 第1回:導入・生体と視覚の関わり <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎医学 I オリエンテーション・導入、「目」を見る前に「人」を見る、視能訓練士(ORT)は目の検査をする「技師」であり、視機能の「リハビリテーション職」である、</li> <li>・国家試験における「基礎医学大要」の配点と重要性、</li> <li>・WHOの「健康の定義」とICF(国際生活機能分類)、</li> <li>・「基礎医学 I」と「基礎医学 II」の内容(基礎医学 I:視覚システムの解剖生理(視能訓練士の核となる分野)、基礎医学 II:全身の生理機能と病態生理(各臓器と眼の関係)</li> <li>・生体維持と全身疾患(糖尿病・高血圧・遺伝など)</li> <li>・生命現象とホメオスタシス(恒常性)の概念</li> <li>・生体リズムと視覚情報(視交叉上核と松果体、メラトニンの生理)</li> <li>・視能訓練士が解剖生理学を学ぶ目的:全身疾患が「目」に現れる理由</li> </ul> 第2回:眼球の構造(1)外膜と内膜の微細構造 <ul style="list-style-type: none"> <li>・角膜の5層構造(上皮～内皮)と透明性維持の生理学的メカニズム</li> <li>・網膜の層構造(10層)と各細胞の機能、黄斑部・中心窩の特殊性</li> </ul>		

<ul style="list-style-type: none"> <li>・視細胞(桿体・錐体)の光受容プロセスと分布の差異</li> </ul> <p>第3回:眼球の構造(2)中膜と屈折媒体の生理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ブドウ膜(虹彩・毛様体・脈絡膜)の血管系と色素の役割</li> <li>・水晶体の解剖と調節(ピント合わせ)の機序、硝子体の構造</li> <li>・房水の産生・流出路(隅角)と眼圧維持のメカニズム</li> </ul> <p>第4回:眼窩(がんか)の解剖学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・眼窩を構成する7つの骨(前頭・頬・上顎・篩・蝶形・涙・口蓋骨)の配置</li> <li>・視神経管、上眼窩裂、下眼窩裂を通過する神経・血管・筋肉の整理</li> </ul> <p>第5回:外眼筋の動態生理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・6本の外眼筋(上・下・内・外直筋、上・下斜筋)の起始と停止</li> <li>・眼球運動の基本作用:第1次・第2次・第3次作用(回旋運動を含む)</li> <li>・<b>眼球運動の支配法則(シェリントン・ヘリングの法則)</b></li> </ul> <p>第6回:神経系(1)視覚伝導路と視中枢</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視神経から視交叉(交叉の法則)、視索、外側膝状体への信号伝達</li> <li>・視放射の走行と一次視覚野(17野)の機能局在</li> </ul> <p>第7回:神経系(2)眼球運動を司る脳神経(Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ):脳神経(1)眼球運動の制御系</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動眼神経(Ⅲ)、滑車神経(Ⅳ)、外転神経(Ⅵ)の起始核(中脳・橋)と走行</li> <li>・各神経の支配対象と、神経麻痺による眼位異常の基礎生理</li> </ul> <p>第8回:神経系(3)顔面の知覚と運動(Ⅴ・Ⅶ):脳神経(2)顔面の知覚・運動と反射</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三叉神経(Ⅴ)の眼神経領域による角膜知覚の受容</li> <li>・顔面神経(Ⅶ)による閉瞼(眼輪筋)と涙腺の分泌制御</li> <li>・角膜反射の神経回路(求心路Ⅴ・遠心路Ⅶ)</li> </ul> <p>第9回:神経系(4)自律神経と瞳孔生理:自律神経と瞳孔反射の生理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・瞳孔散大筋(交感)と瞳孔括約筋(副交感)の拮抗支配</li> <li>・縮瞳・散瞳の反射経路と、調節に伴う近見三反応(調節・縮瞳・輻輳)</li> </ul> <p>第10回:神経系(5)中枢神経の統合と対光反射:脳幹・中枢神経の統合機能</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・脳幹(中脳・橋・延髄)の各部反射中枢(対光反射、呼吸、循環)</li> <li>・視床の感覚中継機能と視床下部の恒常性維持(体温・摂食・飲水)</li> </ul> <p>第11回:平衡感覚と視線の安定化(VOR)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・内耳(半規管・前庭)の解剖と加速度受容の仕組み</li> <li>・前庭眼反射(VOR)の経路:頭の動きに合わせた眼球の補償運動</li> </ul> <p>第12回:循環器系(1)心臓と眼の血管網</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・心臓の構造、刺激伝導系と心周期</li> <li>・内頸動脈から眼動脈への分岐路、網膜中央動脈の走行</li> <li>・血液眼関門(BOB)の概念</li> </ul> <p>第13回:運動器(全身)と神経筋伝達</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・骨格筋の微細構造(アクチン・ミオシン)と滑り説</li> <li>・神経筋接合部におけるアセチルコリンの放出と受容の機序</li> </ul> <p>第14回:細胞の構造・組織・体液バランス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・細胞内小器官(中心体、ミトコンドリア等)と細胞分裂</li> <li>・血液の組成、血漿タンパク質(アルブミン)とコロイド浸透圧</li> </ul> <p>第15回:前期まとめと解説(視覚関連の解剖・生理)</p>	
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。</p> <p>講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にくること。</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>「人体の構造と機能」第5版(医学書院)</p> <p>講義内容に沿ったプリント資料を配布</p> <p>使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)</p> <p>副教材:スライドプリントを配布</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。</p> <p>定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%</p> <p>受講態度および提出物の状況 20%</p>

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 基礎医学Ⅱ		授業の種類 講義		授業担当者 山浦あゆみ	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年 前期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）</p> <p>看護師、看護教員、介護教員の資格を有している教員が、臨床経験と教育経験を活かして講義し、実務経験に基づいた視点で授業を展開することで、学生が医療現場で即戦力となるための理解と態度形成を促す。視能訓練士を目指す学生に必要な人体の構造と機能について教授する。基礎医学で学習する内容はとても膨大であり、初めて習うことも多く、まとも理解することは非常に困難なので、わかりやすく講義をしていく。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>基礎医学Ⅰを土台として、人体の正常構造（解剖学）と機能（生理学）を学修する。視能療法学に関わる幅広い基礎領域と専門領域に関する深い知識を修得する。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>呼吸器系、消化器系、運動器系、循環器系、血液、免疫系、神経系、感覚器系について、器官系毎に人体の正常な構造と機能について概説する。</p> <p>視能訓練士にとって重要な視覚器と平衡聴覚器、脳について、その構造と機能を把握できるようにする。人体解剖生理学の知識は、医療に携わる者にとって最も基本的な学問であるため、細胞・組織・器官の階層性の観点から人体の正常な形態と構造、機能と役割を系統的に学び、臨床実践に必要な人体の知識を身につける。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 医療従事者に必要な人体の基礎的な医学知識の確立を目指す。</li> <li>2. 人体を構成する各部位・器官の名称と形態・構造の特徴を説明できる。</li> <li>3. 正常な人体機能、各器官の働きを具体的に説明できる。</li> <li>4. 人体の器官・組織の機能・構造的な相互関係を説明できる。</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数【後期】全身の生理機能と病態生理(各臓器と眼の関係)</p> <p>第1回: 血液・免疫の生理と生体防御</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・血球(赤血球、白血球、血小板)の分化と各機能</li> <li>・免疫応答(自然免疫・獲得免疫)と抗体の種類(IgG, IgE等)</li> <li>・抗原抗体反応に伴う組織変化(アレルギー反応の生理)</li> <li>・炎症の5徴候と補体の役割</li> </ul> <p>第2回: 循環器系(2) 血管生理と血圧調節</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動脈、静脈、毛細血管の構造差と物質交換(拡散)</li> <li>・血圧の調節因子と、高血圧が微小血管(網膜)に与える影響</li> </ul> <p>第3回: 循環障害と体液の病態生理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・浮腫(むくみ)の4大原因: 血管透過性、浸透圧、静脈圧、リンパ管</li> <li>・血栓、塞栓、梗塞のプロセスと組織への酸素供給不足</li> <li>・組織の虚血と変性の病態生理</li> </ul> <p>第4回: 呼吸器系の生理とガス交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・換気力学(横隔膜の運動)と肺胞での外呼吸</li> <li>・ヘモグロビンの酸素結合特性(酸素解離曲線)の理解</li> </ul> <p>第5回: 内分泌系(1) 調節機構と甲状腺</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホルモンの分泌調節(ネガティブ・フィードバック)</li> <li>・甲状腺ホルモンによる代謝調節と、分泌異常に伴う眼周囲組織の変化、甲状腺・副腎・その他</li> <li>・甲状腺ホルモン、副甲状腺、副腎皮質・髄質、バセドウ病(甲状腺眼症)による眼球突出、複視の病態生理</li> </ul>					

第6回:内分泌系(2)副腎と膵臓の生理

- ・副腎皮質・髄質ホルモンの作用(ストレス応答と血圧)
- ・インスリンによる血糖調節とグリコーゲン代謝の仕組み下垂体と視床下部
- ・ホルモン分泌の調節(フィードバック機構)、下垂体前葉・後葉ホルモン、下垂体腫瘍による視交叉圧迫(両耳側半盲)のメカニズム

第7回:糖・脂質代謝の異常と病態生理

- ・膵臓と糖尿病インスリンによる血糖調節メカニズム
- ・糖尿病の3大合併症(網膜症、腎症、神経障害)と血管障害
- ・高血糖が持続することによる血管内皮障害のメカニズム
- ・代謝異常が視細胞や網膜神経組織に及ぼす影響

第8回:消化器系の生理と栄養吸収

- ・消化管の運動(蠕動)と消化液の分泌
- ・肝臓の多機能性(代謝、解毒、貯蔵)と門脈血流

第9回:泌尿器系の生理と排泄

- ・ネフロン(腎小体・尿細管)での濾過・再吸収・分泌
- ・腎臓による体液量・電解質バランスの調節機能

第10回:生殖・発生と遺伝の生理学

- ・常染色体と性染色体の構造、減数分裂のプロセス
- ・メンデルの法則、X連鎖(伴性)遺伝の生理学的基礎、染色体、遺伝子、遺伝形式(優性・劣性)、伴性遺伝(X連鎖遺伝)、先天赤緑色覚異常の遺伝形式

第11回:微生物の生理と生体反応

- ・細菌、ウイルス、真菌の増殖特性と宿主細胞への影響
- ・滅菌(熱、ガス)および消毒の生理学的原理

第12回:感覚器の生理(耳・鼻・舌・皮膚)

- ・聴覚、嗅覚、味覚、皮膚感覚(痛覚・温覚・触覚)の受容と伝達
- ・感覚器間の相互作用(多感覚統合)の基礎

第13回:加齢・老化に伴う身体的変化

- ・老化のメカニズムと各臓器の生理的機能低下
- ・廃用症候群の生理学的側面とリハビリテーションの意義

第14回:救急処置とバイタルサイン

- ・バイタルサイン(体温・脈拍・血圧・呼吸・意識状態)の測定と基準値
- ・眼科検査室で起こりやすい緊急事態(迷走神経反射、過換気、アレルギー)への対応
- ・洗眼、心肺蘇生(AED)、救急カードの基礎知識

第15回:まとめと解説(全身生理および病態生理の総括)

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。  
講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

[使用テキスト・参考文献]

講義内容に沿ったプリント資料を配布  
『人体の構造と機能』(第5版)(医学書院)  
『イラスト解剖学』(南江堂)  
『標準生理学』(医学書院)  
『視能訓練士のための基礎医学』(金原出版)  
『標準病理学』(医学書院)  
使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)  
副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。  
定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%  
受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 人間発達学(成長・発達と老化)		授業の種類 講義		授業担当者 佐藤由樹路、山浦あゆみ	
授業の回数 15回		時間数(単位数) 30時間(2単位)		配当学科・学年・時期 1年 後期	
				必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 保育士と看護師、それぞれの資格を持った教員が、保育所や病院・介護施設および保育・介護の専門学校勤務の経験を活かし、生涯の心身の変化等について講じる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人の発達の流れを理解し、年齢に応じた視機能の特徴をつかむ</li> <li>・ 発達段階に応じた検査や支援の方法を学ぶ</li> <li>・ 発達障害や加齢による変化に対応できる知識を身につける</li> <li>・ 国家試験に出題される発達関連の内容に対応できる力を養う</li> </ul> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>視能訓練士の対象者は、新生児から高齢者まで幅広い。そのため様々なライフステージの対象者に専門職として関わるための知識として、人間を発達の視点からとらえた変化を学習する。またそれぞれの発達段階に起こりうる課題や問題点を学ぶ。</p> <p>人間の成長と発達の観点から人の一生についての基礎的知識を習得し、老化に伴うこころとからだの変化と生活及びその特徴に関する基礎的知識を習得する。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 人間の誕生から死に至るまで続く発達と変化を、理解できる。</li> <li>2. 乳児期・幼児期の発達の特性について説明できる</li> <li>3. 運動発達・反射反応について説明できる</li> <li>4. 発達障害や特別な支援が必要な子どもの特徴を理解する</li> <li>5. 各発達段階で起こりえる課題や障害について説明できる</li> <li>6. 感覚・知覚・認知・社会性の発達の特徴について説明できる。</li> <li>7. 青年期・成人期・老年期の特徴を説明できる。</li> <li>8. 高齢者の加齢による視機能の変化や身体的・精神的・社会的な変化について説明できる。</li> <li>9. 老化に伴うこころとからだの変化が、どのように生活へ影響するのかを理解できる。</li> <li>10. 高齢者に多い疾患・症状と生活上の留意点ができる。</li> <li>11. 国家試験に出る発達関連の問題に対応できる</li> </ol> <p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション)人間の成長と発達の基礎的知識、発達段階の理解、成長と発達の定義、一般的原則、さまざまな発達理論・発達段階の概要について理解する</li> <li>2. 胎児期の発達と眼球形成             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 妊娠週数ごとの器官形成</li> <li>・ 視覚器の発達と先天異常(小眼球・無眼球)</li> </ul> </li> <li>3. 新生児期の特徴と原始反射、身体的発達、反射/反応、運動・発達、手の機能(巧緻動作)の発達             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ モロー反射・吸啜反射・把握反射</li> <li>・ 国家試験での反射の分類と消失時期</li> </ul> </li> <li>4. 乳児期の視機能発達と検査法、新生児・乳児期の発達について理解する、             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ コミュニケーション・社会性の発達、感覚・認知の発達、基本的生活習慣・遊びの発達</li> <li>・ 注視・追従・視力の発達</li> <li>・ 視力検査(TAC、OKN、ランドルト環)の選択と適応年齢</li> </ul> </li> <li>5. 幼児期の発達と弱視・斜視の早期発見             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1～6歳の運動・言語・社会性の発達</li> <li>・ 国家試験での弱視の分類と治療法(遮蔽訓練など)</li> </ul> </li> <li>6. 学童期の発達と視機能の安定、思春期の発達と心理的变化             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 両眼視・調節・輻輳の発達</li> </ul> </li> </ol>					

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校生活における視機能支援と検査法</li> <li>・ 自我形成・ホルモン変化・視機能への影響</li> <li>・ 国家試験での思春期の特徴と支援方法</li> </ul> <p>7. 発達障害(ASD・ADHD)の特徴と視機能、脳性麻痺・ダウン症などの発達特性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 注意・注視・視覚認知の偏り</li> <li>・ 国家試験での行動特性と検査時の配慮</li> <li>・ 発達評価法とスクリーニング</li> <li>・ K式発達検査・遠城寺式・新版K式など</li> <li>・ 国家試験での評価法の特徴と適応年齢</li> <li>・ 発達支援と家族対応</li> <li>・ 保護者との関係構築・療育との連携</li> <li>・ 国家試験での支援体制と相談機関</li> </ul> <p>8. 人間発達学の意義と国家試験出題傾向</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人間発達学の基本概念(成長・成熟・学習)</li> <li>・ 国家試験で問われる発達関連項目の整理</li> <li>・ 成人期の発達と生活習慣</li> <li>・ 職業・ストレス・VDT作業と眼精疲労</li> <li>・ 国家試験での生活習慣病と視機能の関連</li> </ul> <p>9. 高齢期の発達と身体的変化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢期の年齢区分(前期・後期高齢者)</li> <li>・ 加齢による筋力・感覚・神経系の変化</li> <li>・ 高齢期・老齢期の発達と課題について理解する、身体的・認知的・情緒的・社会的発達</li> <li>・ ライチャードによる老年期の性格分類(5分類)</li> </ul> <p>10. 高齢期の視機能変化①: 調節と視力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 老視のメカニズム</li> <li>・ コントラスト感度・暗順応の低下</li> </ul> <p>11. 高齢期の視機能変化②: 眼球運動と両眼視</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 輻輳力・眼球運動の低下</li> <li>・ 両眼視障害とその影響</li> <li>・ 高齢者に多い眼疾患</li> <li>・ 白内障・加齢黄斑変性・緑内障の特徴</li> </ul> <p>12. 高齢者の心理・社会的側面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症・うつ・孤独感の理解</li> <li>・ 高齢者とのコミュニケーションの工夫</li> <li>・ 老年期の定義と老年期の発達課題、喪失体験</li> </ul> <p>13. 演習) 高齢者疑似体験、加齢にともなう視覚の変化、身体機能の変化、車椅子体験と介助方法</p> <p>14. 発達と関連法制度・倫理</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害者総合支援法・児童福祉法・ICF分類、介護保険制度・地域包括支援センター</li> <li>・ 国家試験での法制度の出題ポイント</li> </ul> <p>15. 講義のまとめと解説</p>	
---	--

[履修に当たっての留意点]  
 復習: 授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。  
 講義中: 分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>講義内容に沿ったプリント資料を配布</p> <p>大城昌平(編集): リハビリテーションのための人間発達学 第3版、(メディカルプレス)</p> <p>人間発達学 (コメディカルのための専門基礎分野テキスト) 改訂5版、中外医学社</p> <p>岩崎清隆(著): 標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野 人間発達学 第2版 医学書院</p> <p>使用器材等: プロジェクター(視覚教材スライド講義)</p> <p>副教材: スライドプリントを配布</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。</p> <p>定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%</p> <p>受講態度および提出物の状況 20%</p>
--	--

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 保育学		授業の種類 講義		授業担当者 佐藤 由樹路	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期		必修・選択 必修	
実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 幼稚園教諭として幼稚園、認定こども園でクラス担任、主任職としての経験を踏まえ講義を行う。子どもの成長発達のために必要な学びを、実際に子どもと関わり培った知識を交えながら講義を行う。					
[授業の目的・ねらい] 乳幼児の心身の成長発達について学ぶとともに、子どもの生活について理解を深める。また、子どもと遊びを通して、子どもとの関わり方やコミュニケーションの方法を学ぶ。					
[授業全体の内容の概要] 乳幼児の心身の発達について理解し、年齢に応じた関わり方やコミュニケーションの取り方を学ぶ。子どもの活動を理解し、表現活動や製作活動を実際に行い学びにつなげる。附属の認定こども園の園児と交流し、遊びを通して子どもとの関わり方を学ぶ。					
[授業修了時の達成課題(到達目標)] <ul style="list-style-type: none"> <li>・乳幼児の心身の成長発達の過程を理解し、年齢に応じた対応ができるようになる。</li> <li>・子どもの活動を理解し、遊びや表現活動、製作活動ができるようになる。</li> <li>・子どもを取り巻く現代的課題を理解し、子どもへの関わり方やコミュニケーションの取り方の配慮を知る。</li> </ul>					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 <ol style="list-style-type: none"> <li>1.保育、子どもを取り巻く環境について解説する。【講義】</li> <li>2.子ども理解について解説する。【講義】【グループワーク】</li> <li>3.子どもの心身の発達について解説する。①身体の発達【講義】</li> <li>4.子どもの心身の発達について解説する。②内面の発達【講義】</li> <li>5.環境を通しての保育について解説する。【講義】</li> <li>6.子どもの遊びについて表現活動を行う。(季節のうた、手遊び、言葉遊び)【実技】</li> <li>7.園児交流(附属の認定こども園で園児と遊ぶ)【実技】</li> <li>8.子どもの遊びについて制作活動を行う。(折紙、新聞紙遊び)【実技】</li> <li>9.園児交流(附属の認定こども園で園児と遊ぶ)【実技】</li> <li>10.子どもとのコミュニケーションの取り方について説明する。【講義】【ディスカッション】</li> <li>11.非認知能力について解説する。【講義】</li> <li>12.子どもの権利及び課題のある子どもについて解説する。【講義】</li> <li>13.保育の計画と実践に実際について解説する。【講義】【グループワーク】</li> <li>14.保育の現代的課題について説明する。【講義】</li> <li>15.今後の課題とまとめ【講義】</li> </ol>					
[履修に当たっての留意点] 日常生活の中で子ども(乳幼児)に関する情報や話題を気に留めておく。					
[使用テキスト・参考文献] 『新時代の保育のキーワード 乳幼児の学びを未来につなぐ12講』 著者 汐見稔幸 出版社 小学館 2024年3月出版			[単位認定の方法及び基準] 試験(60%)、授業態度(10%)、出欠席(10%)、課題提出(20%)		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 臨床医学	授業の種類 講義	授業担当者 山浦あゆみ	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年 後期	必修・選択 必修
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>看護師、看護教員、介護教員の資格を有している教員が、臨床経験と教育経験を活かして各職種の業務内容を講義し、医療現場での多職種連携の重要性について学ぶ。医師・薬剤師・リハビリ職・介護職などと連携したチーム医療を実践してきた経験や、看護教員・介護教員として、養成校での長年に渡る教育経験があり、実務経験に基づいた視点で授業を展開することで、学生が医療現場で即戦力となるための理解と態度形成を促す。訓練士を目指す学生に必要な全身的な疾患について教授する。医療従事者として知っておくべき医学の基礎を学び、医学用語を正しく理解し、疾病の原因や成り立ちについて理解を深められるように教授する。</p>			
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>視能訓練士として必要な臨床医学の基礎知識を習得する。特に国家試験において頻出となる「全身疾患と眼症状(眼底変化、複視、視野欠損等)の関連」を軸に学習し、症例から疾患を推察できる能力を養う。毎時、過去問題の演習を行い、国家試験合格に直結する知識の定着を図る。</p>			
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・眼科疾患の理解(白内障・緑内障・網膜疾患・角膜疾患などの病態・症状・治療法)</li> <li>・眼球運動と視能矯正(斜視・弱視・複視・眼球運動障害の診断と訓練法)</li> <li>・視覚生理・生理光学(屈折異常・両眼視・視野・色覚などの検査と理論)</li> <li>・眼科薬理・検査法(点眼薬の種類と作用、副作用、OCT・視野検査・眼圧測定などの臨床検査の基礎)</li> <li>・全身疾患との関連(糖尿病・高血圧・甲状腺疾患などが眼に与える影響)</li> <li>・法規・倫理・公衆衛生(視能訓練士法・医療法・福祉制度の基礎知識)</li> </ul>			
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 医療の対象について、さまざまな健康水準や心理過程等を学び、理解する。</li> <li>2. 医療の質と安全の確保について、特に医療安全や感染予防の観点から理解する。</li> <li>3. 医学用語を正しく理解する。</li> <li>4. 疾病の原因や成り立ち、回復過程を理解する。</li> <li>5. 各疾病の原因、病態、治療、回復を理解する。</li> <li>6. 疾病に関する正しい知識を身につけ治療法を理解する。</li> <li>7. 国家試験に出題される臨床医学の基本項目を理解し、正しく説明できる</li> <li>8. 全身疾患と眼科疾患の関連性を理解し、視能訓練士としての対応を考えられる</li> <li>9. 薬剤や神経疾患の知識を活用し、検査・訓練時の安全配慮ができる</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>第1回:臨床医学総論・バイタル・救急</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・臨床医学の全体像、バイタルサインの測定と正常値、意識レベル(JCS/GCS)の評価法、救急蘇生法(BLS・AED)、ショックの5徴</li> </ul> <p>第2回:医療倫理・患者心理・意思決定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インフォームド・コンセント(IC)、パターンリズム、患者の心理(死の受容5段階)、キューブラー・ロスの死の受容過程、医療従事者の守秘義務、アドヒアランス、医療安全(インシデント・アクシデント)</li> </ul> <p>第3回:代謝疾患(糖尿病・糖尿病網膜症)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・糖尿病の病態、HbA1cの診断基準、三大合併症(腎症・網膜症・神経障害)、糖尿病網膜症の分類(単純・増殖停止前・増殖)、新生血管の危険性</li> </ul> <p>第4回:循環器(高血圧・虚血性心疾患)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高血圧の定義、高血圧性眼底(Scheie分類・KW分類)、交叉現象、動脈硬化変化。虚血性心疾患(狭心症・心筋梗塞)と心房細動、心房細動による脳塞栓のリスク</li> </ul>			

第5回:脳血管障害(脳卒中・一過性黒内障)

- ・脳梗塞・脳出血の鑑別、FASTによる脳卒中サイン、一過性脳虚血発作(TIA)に伴う「一過性黒内障」のメカニズム、一過性黒内障と内頸動脈狭窄の関係、半側空間無視、運動性失語

第6回:視路の解剖と視野欠損

- ・視神経から視覚野(後頭葉)までの解剖学的経路、障害部位による視野欠損のパターン(両耳側半盲・同名半盲)、視交叉中央障害=両耳側半盲、視索障害=同名半盲、視覚野障害=黄斑回避を伴う同名半盲

第7回:神経疾患(脱髄疾患・変性疾患)

- ・多発性硬化症(MS)と視神経炎、ウートフ兆候、視神経脊髄炎(NMO)、パーキンソン病の三大症状、レビー小体型認知症、MSと脱髄、ウートフ兆候(体温上昇での悪化)、パーキンソン病の安静時振戦

第8回:筋肉・神経筋接合部疾患(MG・顔面神経麻痺)

- ・重症筋無力症(MG)の日内変動、アイスパケットテスト、顔面神経麻痺(兔眼・露出性角膜炎)、三叉神経麻痺(角膜知覚低下)、MGの眼瞼下垂・複視、顔面神経(閉瞼)と三叉神経(知覚)の区別

第9回:免疫・膠原病(三大ぶどう膜炎)

- ・自己免疫疾患、シェーグレン症候群(ドライアイ)。三大ぶどう膜炎(ベーチェット病、サルコイドーシス、原田病)の全身症状と眼の所見、前房蓄膿、豚脂様KP、滲出性網膜剥離、ステロイド薬の副作用

第10回:血液・腎・呼吸器(貧血・透析)

- ・貧血の種類と結膜所見、腎不全と人工透析の管理、透析患者の眼圧変動、呼吸不全(COPD・喘息)と酸素療法、鉄欠乏性貧血、血液透析と眼圧、白血病眼底(ロス斑)

第11回:小児・先天異常(臨界期・未熟児網膜症)

- ・視機能発達の臨界期、弱視、未熟児網膜症(低体重・酸素投与)、ダウン症、先天性風疹症候群、網膜芽細胞腫臨界期(~8歳)、白色瞳孔と網膜芽細胞腫、色覚異常の遺伝

第12回:感染症と標準予防策(EKC)

- ・標準予防策(手指衛生)、アデノウイルスによる流行性角結膜炎(EKC)の感染対策、針刺し事故防止、スタンダード・プリコーション、リキャップ禁止、アデノウイルスの消毒法

第13回:精神医学・老年医学(心因性・認知症)

- ・心因性視力障害の視野(管状視野)、老年期の身体的変化(フレイル)、脳血管性認知症、アルツハイマー型認知症  
心因性視力障害の視野パターン、長谷川式(HDS-R)、幻視とレビー小体型認知症

第14回:終末期医療・医療安全

- ・死の三徴候、緩和ケア、アドバンス・ケア・プランニング(ACP:人生会議)、臓器提供、医療倫理の4原則(自律、善行、無危害、正義)、死の三徴候の項目、自律尊重の原則

第15回:まとめ

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。

講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと

[使用テキスト・参考文献]

『視能学 第3版』(日本視能訓練士協会 編)

『視能訓練士セルフ・アセスメント』(最新版)

講義内容に沿ったプリント資料を配布

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%  
受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) <b>臨床心理学</b>	授業の種類 <b>講義</b>	授業担当者 <b>植原美智子</b>
授業の回数 <b>15</b>	時間数(単位数) <b>30(2)</b>	配当学科・学年・時期 <b>1年 視能訓練士学科・後期</b>
必修・選択 <b>必修</b>		
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 臨床心理士・公認心理師として、精神科病院における心理面接・心理療法・心理アセスメント等の心理担当職員、教育機関のスクールカウンセラー、児童養護施設における心理療法担当職員など20年の実務経験を活かし、臨床心理学とは何か、について視能訓練士に必要な知識・技術・価値・倫理について講じる。</p>		
<p>[授業の目的・ねらい] 視能訓練士に求められる臨床心理学の基礎として、こころの病理・失調、心理アセスメント、心理療法に関する概要（歴史となりたち、概念、意義、適応及び限界）、その知識を有する者としての社会的責任に関する知識を習得すること。</p> <p>[授業全体の内容の概要] 臨床心理学とは、「科学・理論・実践を統合して、人間行動の適応調整や人格的成長を促進し、さらには不適応・障害・苦悩の成り立ちを研究し、問題を予測し、そして問題を軽減、解消することを目指す学問」と定義されている。本講義では、対人援助職（視能訓練士）として、「こころの失調／異常」を抱える人への適切な対応／他専門家との協働できるようになるための基礎知識を広く取り上げ、その成り立ちや実践との関連を紹介する。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <p>①こころの異常／失調の捉え方やその生起・維持のメカニズムの理論的枠組みについて説明できるようになる。 ②心理アセスメントの目的と意義、代表的手法の種類と特徴と適応に関する基礎的な内容について説明できるようになる。 ③生涯にわたる発達について、幼児期だけでなく生涯いつの時期も大切な変換期であること、生涯を通じて人間は柔軟に変わる可塑性があること、多様な発達方向があることを説明できるようになる。</p>		
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <p>1. 科目オリエンテーションと授業契約 異常心理学－こころの異常・失調をどのように捉えるか 心理的異常とは何か、精神障害や精神疾患との異同が重要なポイントになる。心理学的アセスメントを有効に行うための参照枠を提供する心理的異常について概説する。 【教科書ページ】P68～P71 【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■グループワーク</p> <p>2. 臨床心理学のなりたちと展開 臨床心理学の特徴は、人間行動がどのように維持発展されるかについての科学的研究にかかわる。臨床心理学が科学的探究と専門的援助の2つを大きな柱とする学問であることを概説する。 【教科書ページ】P2～P5 【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■グループワーク</p> <p>3. 臨床心理学の実践活動 人々は社会的な環境の中で対人関係を通して生きている。そのなかで、何らかの問題が生じ、問題解決に向けての実践活動が始まる。こうした臨床心理学の実践活動を解説する。 【教科書ページ】P10～P13 【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■グループワーク</p> <p>4. 臨床心理学の基本理論－物語性(ナラティブ・アプローチ)／社会構成主義／エンパワーメント 時代の変遷によって多様な理論が登場している。各理論の展開や臨床心理学での意義を概説する。 【教科書ページ】P26～P31 【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■グループワーク</p> <p>5. 臨床心理学の基本理論－実証性／科学者－実践者モデル／生物－心理－社会モデル 臨床実践において判断材料として利用できる代表的な根拠(エビデンス)の発展の歴史といくつかの根拠法を概説</p>		

する。

【教科書ページ】P32～P37

【授業方法】■ディスカッション ■グループワーク

6. 問題を理解するー心理アセスメント/ケース・フォーミュレーション

心理学的アセスメントは、人間の心理的特性を幅広く測定・評価するという点で、病理に限定される診断概念とは異なる。その相違について、またアセスメントの諸技法等を説明する。

【教科書ページ】P40～P43

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■グループワーク

7. ライフサイクルと心理的問題ー生涯発達の視点

発達心理学は人生前半だけでなく、中高年期・老年期といった人生の後半も含めた一生涯の発達を対象とする「生涯発達心理学」へと変化した。「生涯発達心理学」の概念について説明する。

【教科書ページ】P96～P97

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

8. ライフサイクルと心理的問題ー乳幼児期

乳幼児期に主たる養育者との関係において大枠が形成され、生涯を通じて様々な他者関係において個体の適応を支えていくシステムとして働くと考えられている。このシステムの働きについて概説する。

【教科書ページ】98～P101

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

9. ライフサイクルと心理的問題ー児童期

子どもを取り巻く環境や対人関係が広がり、子ども自身の心も発達して複雑になる。心の問題が上手く表現出来ない場合は、身体の症状や行動上の問題につながることもしばしば見られる。こうした特徴について概説する。

【教科書ページ】P102～P103

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

10. ライフサイクルと心理的問題ー思春期

思春期に発症率の高い精神的な失調は不登校、摂食障害、強迫性障害、対人恐怖、統合失調症が挙げられる。精神的エネルギーが豊かな時期であることから心理援助における技量が求められる。援助のポイントを説明する。

【教科書ページ】P104～P105

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

11. ライフサイクルと心理的問題ー青年期

青年心理学における「アイデンティティ」の概念について、発達課題に照らして概説する。エリクソンが示したアイデンティティの確立と拡散の課題と現代の青年期の特徴についても説明する。

【教科書ページ】P106～P107

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

12. ライフサイクルと心理的問題ー中年期

中年期は単なる転換期ではなく、危機を孕んだ時期でもある。体力の衰え、記憶などの認知力の低下を実感するようになり、精神医学的にも様々な精神障害の好発期である。この時期の心理的援助について概説する。

【教科書ページ】P108～P111

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

13. ライフサイクルと心理的問題ー老年期

老年期の心理的問題は、身体的機能や社会的機能との連性が強い場合が多いのが特徴である。身体的な症状の背景に心理的問題が隠れていないか、心理的な症状の原因が身体疾患や社会的状況という場合もある。こうした特徴とその心理的支援を概説する。

【教科書ページ】P112～P115

【授業方法】■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

14. ライフサイクルと心理的問題ー家族の発達

家族ライフサイクルの各段階には発達の課題があり、それぞれが発達危機を伴っており、多くの家族に共通する。各段階によくみられる困難とその心理的援助について概説する。

【教科書ページ】P116～P119

【授業方法】 ■講義 ■ディスカッション ■プレゼンテーション

15. まとめと解説

[履修に当たっての留意点]

[受講のルール]

- ・遅刻／欠席については専門学校のルールに則り、事務局に講義開始前に連絡してください。
- ・事務局への事前連絡があった欠席の場合のみ、配布資料の再配布や課題の後日提出を認めます。
- ・教科書を毎回持参してください。
- ・授業中は私用での携帯電話、スマートフォン、タブレット端末の使用せず、卓上にも置かないでください。授業で使用する場合は指示します。
- ・オンライン授業に変更される場合は学修内容の効果を鑑み、講義内容の組み換えを行う場合があります。また、オンライン授業の際の資料配付及び講義ではTeamsMeeting・Google・PDFファイル・Wordファイル・PowerPointファイル等を利用予定です。TeamsMeetingを使う際は、ビデオ「ON」の指示をすることがあります。
- ・提出物は厳守です。
- ・受講者には積極的な参加が求められます。

[授業外時間にかかわる情報]

- ・シラバスにのっとり授業を進めます。したがって、講義前にテキスト該当ページを読み内容を把握しておいてください。
- ・授業時間内で示す課題(ミニ・レポート等)の提出を求める場合があります。
- ・授業終了後は復習し、質問があったら次回の授業で確認してください。
- ・授業内での指示に留意してください。

[使用テキスト・参考文献]

下山晴彦(編) よくわかる臨床心理学[改訂新版] ミネルヴァ書房 (2009) [注]初版第16版刷発行

[単位認定の方法及び基準]

- 事前準備を含めた授業への取り組み(30%) レジユメの作成とプレゼンの仕方(30%)
- 授業後のミニ・レポート(20%)
- 期末レポート(20%)

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 精神保健学		授業の種類 講義		授業担当者 伊藤 弘子	
授業の回数 8回	時間数(単位数) 15時間(1単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期	必修・選択 必修		
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）          精神保健福祉士として、医療・福祉の現場でソーシャルワーカーとして勤務してきた経験を活かし、現代社会が抱える精神保健の現状と課題を様々な疾患を持つ方々への支援の実際を通して講義していく。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]          精神保健学を履修することにより、精神保健福祉の課題をライフステージごとに理解するとともに精神障害に関する基礎知識や支援方法、精神障害者が抱える現状や課題などを理解することで、医療従事者としてどのようなかわり方や支援が求められているのかを考えていく。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要]          基本的な精神疾患と精神障害者の置かれている現状を学ぶことにより、医療従事者として患者と接するうえでの対象者理解を深める。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]          ①現代の精神保健分野の動向と課題を理解する。          ②精神保健の基本的考え方を理解する。          ③現代社会における精神保健の諸課題の実際を理解する。          ④精神保健の保持・増進と発生予防のための支援及び各機関の役割と連携について理解する。          ⑤国際連合の精神保健活動や他の国々における精神保健の現状と対策について理解する。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]          コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 精神保健の概要、動向、基本的な考え方について解説する。【講義】</li> <li>2. 基本的な精神疾患について解説する。—①【講義】 (統合失調症、うつ病、双極性障害、認知症、ストレス関連障害他)</li> <li>3. 基本的な精神疾患について解説する。—②【講義】 (摂食障害、パーソナリティ障害、依存症他)</li> <li>4. ライフステージにおける精神保健の課題について解説する。【講義】 (発達課題、出産・育児、学校教育、介護、ひきこもり、グリーフケア他)</li> <li>5. 精神障害者の福祉について解説する。【講義】 (精神保健福祉法、精神保健福祉士法、総合支援法)</li> <li>6. 現代社会における精神保健の課題について解説する。【講義】 (災害、自殺、性的マイノリティ、多文化、産業精神保健、アンチスティグマ他)</li> <li>7. 精神保健の予防と地域連携、諸外国の精神保健福祉の現状について解説する。【講義】</li> <li>8. まとめと解説 【講義】</li> </ol>					
<p>[履修に当たっての留意点]          前回の復習を習慣づけていくこと。          将来医療従事者として、精神障害者を抱えた患者とどのように関わっていくか、患者の立場に立った視点で考えていくこと。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]          参考:現代の精神保健の課題と支援 第1版 2021年          一般社団法人 日本ソーシャルワーク教育学校連盟          中央法規出版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]          確認テスト 10%・定期テスト 60%・受講態度 30%</p>		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 障害の理解		授業の種類 講義		授業担当者 伊藤 弘子
授業の回数 8回	時間数(単位数) 15時間(1単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期	必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 精神保健福祉士として、医療・福祉の現場でソーシャルワーカーとして勤務してきた経験を活かし、障害者への理解と具体的な支援の実際を講義していく。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい] 障害の理解を履修することにより、障害に関する基礎知識や支援方法を学び、障害者が抱える障害福祉の現状や課題を理解し、医療従事者としてどのようなかかわり方や支援が求められているのかを考えていく。</p>				
<p>[授業全体の内容の概要] 障害者への理解を福祉と医学の両面から学ぶことにより、医療従事者として患者と接するうえでの対象者理解を深める。</p>				
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 障害者福祉の理念を理解する。</li> <li>② 障害によって起こりうる生活障害や心理・行動の特徴を理解する。</li> <li>③ 障害のある人やその家族との関り方や支援の基本を理解する。</li> <li>④ 医学的側面からみた障害を理解する。</li> </ol>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「障害」のとらえ方、基本理念について概説する。【講義】</li> <li>2. 障害による生活障害、心理・行動の特徴について解説する。—①【講義】 (身体障害、知的障害、精神障害他)</li> <li>3. 障害による生活障害、心理・行動の特徴について解説する。—②【講義】 (高次機能障害、発達障害、難病他)</li> <li>4. 障害のある人や家族への関り・支援の基本に関して解説する。【講義・ディスカッション】</li> <li>5. 医学的側面からみた障害について解説する。—①【講義】 (視覚障害、聴覚・言語障害、運動機能障害、心臓機能障害、呼吸器機能障害他)</li> <li>6. 医学的側面からみた障害について解説する。—②【講義】 (ヒト免疫不全ウイルスによる免疫機能障害、肝臓機能障害、高次脳機能障害、発達障害他)</li> <li>7. 障害の特性に応じた支援の実際に関して解説をする。【講義・ディスカッション】</li> <li>8. まとめと解説</li> </ol>				
<p>[履修に当たっての留意点] 前回の復習を習慣づけていくこと。 将来医療従事者として、障害を抱えた患者とどのように関わっていくか、患者の立場に立った視点で考えていくこと。</p>				
<p>[使用テキスト・参考文献] 参考:介護福祉士実務者研修テキスト 第4巻 第3版 2023年 こころとからだのしくみ 中央法規出版</p>			<p>[単位認定の方法及び基準] 確認テスト 10%・定期テスト 60%・受講態度 30%</p>	

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 視能学概論(神経眼科基礎)	授業の種類 講義	授業担当者 當摩 智
授業の回数 8回	時間数(単位数) 15時間(1単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期
必修・選択 必修		
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>担当教員は、大学病院、総合病院眼科、眼科診療所において5年以上の臨床経験(21年)を有し、多様な症例に対する検査・訓練等の支援を実践してきた。また、教育経験(14年)も豊富であり学生指導や演習授業の設計にも精通している。</p> <p>本授業「視能学概論(神経眼科基礎)」は、医療に従事する視能訓練士としての視覚機能の基礎から視能訓練士の臨床業務まで、視能学の全体像を体系的に学ぶ。眼の構造や視覚情報処理の仕組み、視機能検査の基本、斜視・弱視などの疾患理解、そして医療現場での役割や倫理的配慮までを幅広く学習する。視能訓練士として必要な知識・技能・態度を段階的に習得し、今後の専門科目や実習に備える基盤を築く。この授業では臨床現場経験をもとに、上記内容を実践的に学び、臨床現場で求められる実践的な知識と技術を学生に伝えることで、即戦力となる視能訓練士の育成を目指す。このように、の臨床経験と教育現場での指導力を兼ね備えた教員による授業は、教科書的知識にとどまらず、現場で通用する“生きた学び”を提供するものである。</p>		
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視覚機能の基礎理解、眼の構造・機能、視覚情報処理のメカニズムを学ぶことで、視覚系の全体像を把握する。</li> <li>2. 視能訓練士が担う検査・訓練・患者支援の業務内容を知り、医療チーム内での役割を明確にする。</li> <li>3. 視機能検査や訓練法の理論的背景を学び、今後の実習や臨床応用に備える。</li> <li>4. 医療倫理、個人情報保護、患者の心理的側面への配慮など、専門職としての姿勢を養う。</li> <li>5. 小児・高齢者・障害者など多様な対象への支援の在り方を考える。</li> </ol>		
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>医療に従事する視能訓練士としての視覚機能の基礎から視能訓練士の臨床業務まで、視能学の全体像を体系的に学ぶ。眼の構造や視覚情報処理の仕組み、視機能検査の基本、斜視・弱視などの疾患理解、そして医療現場での役割や倫理的配慮までを幅広く学習する。視能訓練士として必要な知識・技能・態度を段階的に習得し、今後の専門科目や実習に備える基盤を築く。</p>		
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視能訓練士の役割と業務内容を法的に理解できる</li> <li>2. 視能学と他の医療分野との関係と多職種連携を理解する</li> <li>3. 視能訓練士の近未来と問題点について理解する</li> <li>4. 神経眼科にかかわる基礎を生理学の立場から学ぶ</li> </ol>		
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視能学とは何か(視能学の定義と目的、視能訓練士の歴史、視能訓練士の役割と職域)</li> <li>2. 視能訓練士の法規と他の医療分野との関係(眼科・神経内科など)と多職種連携</li> <li>3. 視能学の未来と倫理(高齢化社会と視能学のニーズ、小児・高齢者・障害者への支援、医療倫理と個人情報保護、視能学の研究動向とキャリアパス)</li> <li>4. 神経眼科総論(神経眼科を学ぶための解剖・求心路)</li> <li>5. 神経眼科総論(神経眼科を学ぶための解剖・遠心路)</li> <li>6. 神経眼科総論(斜視・弱視との関係性①)</li> <li>7. 神経眼科総論(斜視・弱視との関係性②)</li> <li>8. 講義のまとめと解説</li> </ol>		

<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。</p> <p>講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にくること。</p>	
<p>[使用テキスト・参考文献]</p> <p>神経眼科 第4版: 臨床のために(医学書院)</p> <p>使用器材等: プロジェクター(視覚教材スライド講義)</p> <p>副教材: スライド、プリントを配布</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]</p> <p>評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。</p> <p>定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%・受講態度および提出物の状況 20%</p>

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 視器の解剖学	授業の種類 講義	授業担当者 西村裕樹	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・前期	必修・選択 必修
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）</p> <p>担当教員は、大学病院等の眼科医療機関での5年以上の臨床や、教育・研究の経験を有し、実務に精通している。教員の実務経験は授業内容に直接的に反映されており、実技指導や現場で培われた知見をもとに学生に伝えることができる。また、実際の症例をもとに、学生が臨床的判断力を養えるように授業を展開できる。実務経験を有する教員による授業は、教科書的知識にとどまらず、臨床現場で即戦力となる視能訓練士の育成に寄与するものである。</p>			
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>正常な視機能の理解で、眼球や眼瞼、外眼筋、涙器などの構造を学ぶことで、視覚がどのように成り立っているかを理解する。また、視能訓練士としての基礎知識の習得で解剖学的な知識は、視能訓練士が行う検査・訓練の理論的な土台となる。これにより、異常の発見や適切な対応が可能になる。また、疾患や障害との関連を学び、臨床に活かす力を養う。</p>			
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>医療に従事する視能訓練士としての視器の解剖、生理と、その異常を眼球・眼窩・視路と解説する。視器（眼球とその付属器）の正常構造と生理機能を理解して、「よく見える」ために必要な構造や働きを説明できるようになることを目指す。視能訓練士が行う眼科検査や疾患理解の基礎となる知識を習得する。</p>			
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 眼球や付属器の構造を理解し、図示できる(どこに何があるかを説明できる)</li> <li>2. 各部位の役割や機能を説明できる(「角膜は光を屈折させる」など、働きを言葉で伝えられる)</li> <li>3. 視器の構造と疾患との関係を理解する(解剖学的知識をもとに、病気の原因や症状を考察できる)</li> <li>4. 検査や訓練の理論的背景を説明できる(なぜその検査を行うのか、どの構造に関係するのかを理解する)</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視器の概要と機能 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 視器の定義と構成要素(眼球・付属器・視神経など)</li> <li>・ 視覚の基本的な仕組み</li> </ul> </li> <li>2. 眼球の外層構造(強膜・角膜) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 強膜の役割と構造</li> <li>・ 角膜の屈折機能と栄養供給</li> </ul> </li> <li>3. 眼球の中間層(脈絡膜・毛様体・虹彩) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 血管供給と房水産生のメカニズム</li> <li>・ 虹彩の構造と瞳孔反応</li> </ul> </li> <li>4. 眼球の内層(網膜)①: 構造と細胞層 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 網膜の10層構造</li> <li>・ 視細胞(桿体・錐体)の分布と機能</li> </ul> </li> <li>5. 眼球の内層(網膜)②: 黄斑・視神経乳頭 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中心窩の構造と高解像度視</li> <li>・ 乳頭の解剖と臨床的意義</li> </ul> </li> </ol>			

6. 水晶体と硝子体の構造
  - ・ 水晶体の屈折力と加齢変化
  - ・ 硝子体の成分と網膜との関係
7. 眼球の前房・後房・房水循環
  - ・ 房水の産生・流出経路
  - ・ 緑内障との関連
8. 眼球付属器①:眼瞼・結膜の構造
  - ・ 眼瞼の筋肉と瞬きのメカニズム
  - ・ 結膜の役割と疾患
9. 眼球付属器②:涙器系(涙腺・涙道)
  - ・ 涙液の成分と分泌調節
  - ・ 涙道の解剖と閉塞症
10. 眼球運動に関わる外眼筋と神経支配
  - ・ 6つの外眼筋とその作用
  - ・ 動眼・滑車・外転神経の支配領域
11. 視神経と視路①:視神経・視交叉
  - ・ 視神経の走行と髄鞘
  - ・ 視交叉での情報処理
12. 視神経と視路②:視索・外側膝状体・視放線
  - ・ 視覚情報の中樞伝達経路
  - ・ 視野欠損との関連
13. 視中枢(一次視覚野・連合野)
  - ・ 後頭葉の視覚野の構造
  - ・ 視覚認知と高次処理
14. 発生学的視器形成過程
  - ・ 胚子期の眼球形成
  - ・ 先天異常の理解
15. 講義のまとめと解説

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。

講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

[使用テキスト・参考文献]

『視能学』第3版(小林義治ほか)

『視能訓練士国家試験受験者必携!』(文光堂)

『視能学エキスパート』シリーズ(日本視能訓練士協会監修)

標準眼科学

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う)  
80%・受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 視覚生理学 I (分解能、空間感覚、 視野、色覚、光覚)		授業の種類 <p style="text-align: center;">講義</p>		授業担当者 <p style="text-align: center;">當摩 智</p>	
授業の回数 <p style="text-align: center;">15回</p>	時間数(単位数) <p style="text-align: center;">30時間(2単位)</p>	配当学科・学年・時期 <p style="text-align: center;">1年・後期</p>		必修・選択 <p style="text-align: center;">必修</p>	
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 担当教員は、大学病院、総合病院、眼科診療所において5年以上の臨床経験(21年)を有し、多様な症例に対する検査・訓練等の支援を実践してきた。また、教育経験(14年)も豊富であり学生指導や演習授業の設計にも精通している。 教員の実務経験は授業内容に直接的に反映されており、視覚生理学 I では、人間の視覚機能のうち「分解能」「空間感覚」「視野」「色覚」「光覚」といった基本的な要素について、生理学的な観点から理解を深めることを目的とする。これらの視覚機能がどのように成立し、どのようなメカニズムで知覚されるかを学び、臨床での患者に対する検査等に、これを結び付ける土台を形成する。実務経験を有する教員による授業は、教科書的知識にとどまらず、臨床現場で即戦力となる視能訓練士の育成に寄与するものである。					
[授業の目的・ねらい] 視覚生理学 I では、人間の視覚機能のうち「分解能」「空間感覚」「視野」「色覚」「光覚」といった基本的な要素について、生理学的な観点から理解を深めることを目的とする。これらの視覚機能がどのように成立し、どのようなメカニズムで知覚されるかを学ぶことで、視能訓練士としての臨床的判断力と検査技術の理論的基盤を築く。また、心理物理学的手法を用いた視覚機能の評価方法を習得し、正常および異常の視覚反応を科学的に捉える力を養う。					
[授業全体の内容の概要] 視覚の基本的な生理機能について、検査や体験を通じて学ぶ。特に「分解能」「空間感覚」「視野」「色覚」「光覚」といった視覚の構成要素に焦点を当て、視能訓練士が行う検査の意義や理論的背景を理解する視能訓練士として必要な「見る」という能力基本の知識を習得する。					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 光覚の理解：光に対する感受性や明暗の知覚メカニズム(分解能・空間感覚・光覚)</li> <li>・ 視野の基礎：視野の広がりや欠損の評価方法</li> <li>・ 色覚の実施：色の識別能力とその異常について</li> <li>・ 検査：実際の検査を学び、それぞれの検査の特性を学ぶ</li> </ul>					
[授業修了時の達成課題(到達目標)]					
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視覚の基本的な生理機能である分解能、空間感覚、視野、色覚、光覚について、眼科学、心理物理学のおよび生理学的な観点から学ぶ。</li> <li>2. これらの機能を測定する検査の原理や評価方法から、正常および異常の代表例を学ぶ。</li> </ol>					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]					
コマ数					
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視覚生理学の概要と眼球の構造：視覚とは何か、視覚生理学の目的、眼球の基本構造(角膜・水晶体・硝子体・網膜など)、視覚情報の伝達経路(光→網膜→視神経→視覚野)を概説。</li> <li>2. 網膜の細胞構造と機能(網膜に存在する桿体細胞と錐体細胞の違い、双極細胞・水平細胞・神経節細胞の役割、視覚情報の初期処理について)</li> <li>3. 分解能の定義と視力との違い：分解能とは何か(最小可視角)、視力との関係、分解能の測定方法(ランドルト環、スネレン表)、臨床での活用について</li> </ol>					

4. 分解能に影響する要因: 照明条件、コントラスト、網膜の部位(中心窩 vs 周辺部)、年齢、疾患(白内障・黄斑変性など)による影響
5. 空間感覚の基礎と立体視のメカニズム: 両眼視の仕組み、網膜像の差異(視差)による立体視、立体視の成立条件(両眼の位置・協調運動)、立体視の評価法(ステレオテスト)
6. 奥行き知覚と運動視の仕組み: 奥行きの手がかり(大小・重なり・陰影・運動視差)、モーションパララックスの原理、動く物体の知覚とその神経機構について
7. 空間定位と方向感覚の神経機構: 空間定位とは何か、方向感覚の成立に関わる視覚・前庭・体性感覚の統合、方向感覚障害(空間失認など)の症状と評価方法
8. 視野の定義と測定法: 視野の範囲(水平・垂直)、中心視野と周辺視野の違い、視野測定法(静的・動的視野計)、ゴールドマン視野計や自動視野計の理論
9. 視野障害の種類と原因: 視野欠損の分類(中心暗点、求心性狭窄、半盲など)、原因疾患(緑内障、網膜色素変性、脳梗塞など)、視野障害の臨床的意義と理論
10. 色覚の基礎と三色説: 色覚の理論(ヤング・ヘルムホルツの三色説)、錐体細胞の種類(L・M・S錐体)、波長感度、色の混合と分離の原理
11. 色覚異常の分類と検査法: 先天性色覚異常(色盲・色弱)、後天性色覚異常(視神経疾患など)、異常三色覚・二色覚・単色覚の違い、色覚検査法(石原表、パネルD-15、アノマロスコープ)
12. 光覚の定義と明暗の知覚: 光覚とは何か、明暗の知覚のメカニズム、暗順応・明順応の生理学的過程、杆体・錐体の役割、閾値の測定方法(コールラウシュの屈曲点)
13. 明るさの知覚とコントラスト感度: 明るさの主観的知覚、ウェーバーの法則、コントラスト感度の定義と測定(CSF)、臨床応用(白内障・網膜疾患の評価)
14. 講義のまとめと解説①
15. 講義のまとめと解説②

[使用テキスト・参考文献]

『視能学 3版』(文光堂)

『病気がみえる 眼科』

使用器材等: プロジェクター(視覚教材スライド講義)

教材: スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

講義の試験は 100 点満点

定期テスト(選択式) 80% 小テスト(選択式)(4 回分  
平均点×0.2) 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名)		授業の種類		授業担当者	
視能検査学総論		講義		中嶋 敬	
授業の回数	時間数(単位数)	配当学科・学年・時期		必修・選択	
15回	30時間(2単位)	1年・前期		必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>「視能訓練学(斜視)」は、斜視の病態理解から検査・訓練・術前術後の評価までを体系的に学ぶことを目的としている。担当教員は、大学病院眼科において10年以上の臨床経験を有し、多様な症例に対する検査・訓練等の支援を実践してきた。また、教育経験も豊富であり、学生指導や演習授業の設計にも精通している。</p> <p>授業では、教員の実務経験を活かし、斜視検査(カバーテスト、眼位測定、両眼視機能検査など)の実技指導を行うほか、実際の症例をもとに診断から訓練・手術連携までの流れを具体的に解説する。術前術後の視機能評価やプリズム処方の判断など、臨床現場で求められる実践的な知識と技術を学生に伝えることで、即戦力となる視能訓練士の育成を目指す。このように、大学病院での臨床経験と教育現場での指導力を兼ね備えた教員による授業は、教科書的知識にとどまらず、現場で通用する“生きた学び”を提供するものである。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>視能検査の基本的な意義・原理・方法を理解し、眼科領域における視機能評価の基礎を習得する。関連科目(生理光学、視覚生理学、眼解剖学など)との統合的理解を目指す。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>視能訓練士に必要な視機能検査の基礎知識と技術を体系的に学ぶ。視力、屈折、眼位、両眼視、視野、色覚など、眼科領域における主要な検査項目について、原理・方法・評価の観点から理解を深め、臨床応用力を養う。さらに、検査結果の記録・解釈・症例検討を通じて、実践的な判断力と専門的態度を身につけることを目的とする。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視能検査の基礎知識の習得 <ul style="list-style-type: none"> <li>・各種視能検査(視力、屈折、眼位、両眼視、視野、色覚など)の目的・原理・方法を説明できる</li> <li>・検査機器の構造と使用方法を理解し、安全かつ正確に操作できる</li> </ul> </li> <li>2. 検査結果の理解と評価 <ul style="list-style-type: none"> <li>・検査データを正しく読み取り、異常所見を識別できる</li> <li>・症例に応じた検査選択と結果の臨床的意義を説明できる</li> </ul> </li> <li>3. 実践的スキルの習得 <ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的な視能検査を模擬患者に対して実施できる</li> <li>・検査記録を正確に記載し、他職種と情報共有できる</li> </ul> </li> <li>4. 倫理的・専門的態度の確立 <ul style="list-style-type: none"> <li>・検査中の患者対応において、倫理的配慮とコミュニケーションを意識できる</li> <li>・視能訓練士としての専門性と責任を理解し、チーム医療の一員として行動できる</li> </ul> </li> </ol> <p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーションと視能検査の意義(視能訓練士の役割、視能検査の目的と分類)</li> <li>2. 視力検査の基礎(視力の定義、測定方法、ランドルト環の読み方)</li> <li>3. 屈折検査の原理(屈折異常の種類、検影法とオートレフ)</li> <li>4. 調節と輻輳の検査(近点測定、AC/A比、調節力と輻輳力の評価)</li> <li>5. 眼位と斜視の検査①(カバーテスト、眼位の分類、異常眼位の検出)</li> <li>6. 眼位と斜視の検査②(ヘスチャート、ランタンテスト、眼球運動障害)</li> </ol>					

7. 両眼視機能の検査(立体視、融像、Worth 4-dot、Bagolini線条)
8. 弱視の検査と評価(弱視の定義、視力発達、遮蔽試験と治療評価)
9. 視野検査の基礎(視野の構造、手動・自動視野計、ゴールドマン視野)
10. 色覚検査(色覚異常の分類、石原表、パネルD-15)
11. 眼球運動検査(眼球運動の分類、眼振、追従・跳躍運動の評価)
12. 検査結果の評価と記録(検査データの読み方、カルテ記載、症例検討)
13. 臨床応用と症例検討(実際の症例を通じた検査選択と評価方法の検討)
14. 模擬検査演習、学生同士の相互評価、教員からのフィードバックと今後の学習指針
15. 講義のまとめと解説

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。

講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

[使用テキスト・参考文献]

視能学エキスパート『視能検査学 第2版』(医学書院)

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う)

80%・受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 視覚情報処理学(神経系含む)		授業の種類 講義		授業担当者 西村裕樹	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>担当教員は、大学病院等の眼科医療機関での5年以上の臨床や、教育・研究の経験を有し、検査・訓練・保護者支援などの実務に精通している。教員の実務経験は授業内容に直接的に反映されており、実技指導や現場で培われた知見をもとに学生に伝えることができる。また、実際の症例を通じて、学生が臨床的判断力を養えるように授業を展開できる。実務経験を有する教員による授業は、教科書的知識にとどまらず、臨床現場で即戦力となる視能訓練士の育成に寄与するものである。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>神経眼科の総論を学び、将来、視能訓練士として臨床で応用できるよう基礎知識の習得を目標とする。視能訓練士養成課程における「視覚情報処理学(神経系含む)」の授業は、単なる眼球の構造理解にとどまらず、“見えた情報が脳でどう処理されるか”という視覚の本質に迫る。</p> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経系の構造と機能を理解する(視覚情報が網膜から脳へ伝わる経路(視神経・視索・視放線など)を学ぶ)</li> <li>2. 視覚情報処理の流れを体系的に把握する(視覚皮質での統合、奥行き知覚、両眼視、視野闘争などのメカニズムを理解する)</li> <li>3. 眼球運動と神経制御の関係を学ぶ(外眼筋の動きや眼球運動に関わる神経(動眼・滑車・外転神経)との連携を把握する)</li> <li>4. 視覚障害の背景にある神経的要因を理解する(視覚情報処理の異常がどのような症状や疾患につながるかを考察する)</li> </ol> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 神経系の構造と機能を理解する(視神経・視索・視放線・視覚皮質など、視覚伝導路の基本を把握)</li> <li>2. 視覚情報処理の流れを説明できる(網膜から脳への情報伝達、統合、認識までのプロセスを理解)</li> <li>3. 眼球運動と神経制御の関係を説明できる(外眼筋と脳神経(Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ)の連携を解剖生理学的に説明できる)</li> <li>4. 両眼視・奥行き知覚・視野闘争などの統合的処理を理解する(両眼視差や固視微動など、複雑な視覚現象の背景を説明できる)</li> <li>5. 視覚障害の神経的要因を考察できる(視覚情報処理の異常がどのような症状や疾患に結びつくかを理解する)</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視覚情報処理学の導入と視能訓練士の役割理解 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 視覚情報処理とは何かを定義し、視覚系が単なる感覚器官ではなく、脳による高度な情報処理を含むことを学ぶ。</li> <li>・ 視能訓練士がこの知識を臨床でどう活用するかを概観する。</li> </ul> </li> <li>2. 神経系の基礎①:中枢神経系の構造と機能 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 脳と脊髄の構造、神経細胞の働き、シナプス伝達、神経伝達物質の役割を学ぶ。</li> <li>・ 神経活動が視覚処理にどう関与するかを理解する。</li> </ul> </li> <li>3. 神経系の基礎②:末梢神経系と脳神経の視覚的役割 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 視神経を含む脳神経の構造と機能を学び、眼球運動や瞳孔反応との関連を理解する。</li> <li>・ 視覚系に関与する神経の障害がどのような症状を引き起こすかを考察する。</li> </ul> </li> <li>4. 眼球から視覚皮質までの視覚経路の解剖学 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 網膜、視神経、視交叉、視放線、視覚皮質までの情報伝達経路を詳細に学ぶ。</li> <li>・ 各部位の障害が視覚機能に与える影響を理解する。</li> </ul> </li> <li>5. 網膜における初期情報処理の仕組み <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 杆体・錐体細胞の役割、双極細胞・神経節細胞の情報伝達、網膜内での前処理機能を学ぶ。</li> <li>・ 網膜が単なる受容器ではなく、情報処理の起点であることを理解する。</li> </ul> </li> </ol>					

6. 視神経と視交叉の構造と機能的意義
  - ・ 左右の視野情報がどのように交叉し、脳に伝達されるかを学ぶ。
  - ・ 視交叉の障害による視野欠損のパターンを理解する。
7. 視覚皮質の構造と情報処理の分業体制
  - ・ 第一次視覚野(V1)と高次視覚野(V2～V5)の機能を学び、形状・色・動きなどの情報処理の流れを理解する。
8. 背側経路と腹側経路による並列処理の理解
  - ・ 空間認識を担う背側経路(頭頂葉)と、物体認識を担う腹側経路(側頭葉)の違いを学ぶ。
  - ・ 各経路の障害による症状(空間無視、視覚失認など)を考察する。
9. 視覚認知の神経メカニズム
  - ・ パターン認識、顔認識、文字認識などの高次認知機能の神経基盤を学ぶ。
  - ・ 視覚失認やプロソパグノシア(顔認識障害)などの症例を通じて理解を深める。
10. 視覚的注意と記憶との関連性
  - ・ 注意の制御メカニズム、視覚探索、ワーキングメモリとの関係を学ぶ。
  - ・ 注意欠陥や記憶障害が視覚処理に与える影響を理解する。
11. 神経疾患による視覚障害の理解
  - ・ 脳損傷や神経変性疾患による視野欠損、視覚失認、空間無視などの症状を学ぶ。
  - ・ 病変部位と症状の関連の症例を通じて考察する。
12. 視覚情報処理の発達と加齢による変化
  - ・ 乳幼児期の視覚発達、加齢による視覚機能の低下、認知症との関連を学ぶ。
  - ・ 発達障害や老年期の視覚的支援の必要性を理解する。
13. 視覚情報処理に関連する検査法の習得
  - ・ 視野検査、眼球運動検査、認知機能検査などの目的・方法・結果の解釈を学ぶ。
  - ・ 臨床での評価に必要な技術を身につける。
14. 視覚情報処理障害への訓練とリハビリテーション
  - ・ 注意訓練、視覚探索訓練、認知リハビリテーションなどの介入方法を学ぶ。
  - ・ 視能訓練士が関与できる支援の実践的な方法を検討する。
15. 講義のまとめと解説

[履修に当たっての留意点]  
 復習: 授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。  
 講義中: 分からないことは、授業中もしくは次回の講義で質問をする。

<p>[使用テキスト・参考文献]          「病気がみえる」、『視能学 第3版』(文光堂)          『視能訓練士セルフアセスメント 第6版』(文光堂)          『眼科ケアシリーズ』(メディカ出版)          使用器材等: プロジェクター(視覚教材スライド講義)          副教材: スライドプリントを配布</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]          評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。          定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う)          80%・受講態度および提出物の状況 20%</p>
--	--



4. 感染症と予防(1) ①感染症の成立要因、②主要な感染症、③標準予防策、④予防接種制度(結核・麻疹などの基本知識)、⑤眼科に関連する感染症(結膜炎、トラコーマなど)他
5. 感染症と予防(2) ①滅菌と消毒、②消毒と感染症、③手洗いと感染性、④医療用廃棄物、⑤理学的消毒法と化学的消毒法
6. 食品保健と栄養 ①栄養素と健康、②生活習慣病予防、③眼の健康と栄養(ビタミンA、ルテインなど)  
④食品の安全と食品衛生管理、⑤食中毒(細菌性食中毒、ウイルス、寄生虫・真菌)
7. 生活環境と保全 ①地球環境、②生活環境の安全、③ごみ・廃棄物の処理、生活環境と健康、④水質・大気・騒音、⑤室内環境とVDT作業(眼精疲労との関連)
8. 医療・介護の保障制度 ①医療保障・保険、②診療報酬、③国民医療費、④介護保険制度、⑤介護予防保健医療制度・地域保健(医療保険制度、保健所の役割)、⑦健康増進法・予防接種法などの関連法規
9. 生活習慣病と健康増進(糖尿病、高血圧、喫煙など) ①生活習慣病の概念と現状、②健康づくり施策、③高齢者保健、④健康政策(健康日本21)
10. 母子保健 ①妊娠・出産・乳幼児保健、②新生児スクリーニング、③斜視・弱視の早期発見と母子保健の連携、④母子保健サービスの現状と課題他、⑤予防接種の提供体制
11. 学校保健・学校保健制度 ①学校保健安全法、②健康診断と視力検査、③近視の疫学と学校環境
12. 「睡眠」に関連するしくみとはたらき ①睡眠のしくみと生理、②睡眠の機能低下の原因とところへの影響、③睡眠障害
13. 難病対策・地域保健と保健医療福祉制度・国民医療と医療制度  
①定義と指定難病、②医療費助成 制度、③地域包括ケア、④保健所・市町村保健センターの役割、⑤視覚障害者支援制度(身体障害者手帳など)、⑥医療保険制度、⑦医療計画、⑧医療の質と安全、⑨眼科医療の現状と課題
14. 産業保健 ①メンタルヘルスとは、②自殺、③産業保健の理念や基本的な考え方、④職場における健康づくり、⑤腰痛対策、⑥VDT 作業と眼の健康、⑦作業環境管理・作業管理・健康管理
15. 講義のまとめと解説

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。  
講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にくること。

[使用テキスト・参考文献]

系統看護学講座「公衆衛生」(医学書院)  
わかりやすい公衆衛生学 第4版(ヌーベルヒロカワ)  
講義内容に沿ったプリント資料を配布  
使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)  
副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数数の3分の2以上の出席が必要。  
定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%  
受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) <b>基礎視能矯正学 I</b>	授業の種類 講義	授業担当者 渡辺 忍
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年 前期
必修・選択 必修		
<b>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</b> 本講義は、厚生労働大臣より視能訓練士免許を受けた視能訓練士であり、視能訓練士臨地実習指導者講習会を修了した渡辺 忍が担当します。臨床現場での経験と実習指導の知見を活かし、教科書上の理論が実際の検査や訓練にどのように直結するかを具体的に解説します。		
<b>[授業の目的・ねらい]</b> 本講義の目的は、視能訓練士の業務の根幹となる視覚生理の仕組みと、眼を光学系として捉える生理光学の原理を基礎から体系的に理解することです。 そのねらいは、視力・視野・色覚といった各検査の理論的背景を深く学び、臨床現場で不可欠な屈折異常の判定や矯正に必要な計算スキルを確実に習得することにあります。全15回のプログラムを通じて、視覚伝達の基礎から具体的な矯正手法までを網羅し、最終試験でその定着を確認します。		
<b>[授業全体の内容の概要]</b> 本科目は、視能訓練士(CO)の専門性の根幹を成す「視覚生理学」「生理光学」「屈折・調節学」を体系的に学ぶ科目です。光の物理的性質が眼球という生体光学系を通り、網膜で電気信号へと変換され、視覚中枢で知覚されるまでの一連のプロセスを網羅します。視力・視野・色覚・光覚といった臨床検査の理論背景に加え、国家試験や臨床現場で必須となる屈折矯正の計算理論と評価技術を習得します。		
<b>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視覚生理学および生理光学の基礎理論(光の性質、視路、模型眼の構造等)を深く理解する。</li> <li>2. 視力、視野、色覚、光覚、電気生理学的検査の各原理と、臨床的な評価意義を説明できる。</li> <li>3. 屈折・調節に関する理論を完全に習得し、度数変換、眼鏡倍率、頂点間距離補正等の光学計算を正確に行える。</li> </ol>		
<b>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</b> コマ数 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 第1回: 視覚生理の基礎(光の性質、視覚伝達系)</li> <li>● 第2回: 視力(形態覚、4つの閾値、logMAR)</li> <li>● 第3回: 視野 I(概念、Traquairの視野の島)</li> <li>● 第4回: 視野 II(視野異常、動的・静的測定法)</li> <li>● 第5回: 限界フリッカ(CFF)(時間的解像力、視神経疾患)</li> <li>● 第6回: 色覚(三色説・反対色説、先天色覚異常と検査)</li> <li>● 第7回: 光覚(網膜の二元性、暗順応曲線、夜盲)</li> <li>● 第8回: 電気生理学 I(ERGの原理と波形解析)</li> <li>● 第9回: 電気生理学 II(VEP・EOGの臨床意義)</li> <li>● 第10回: 生理光学の基礎(非共軸系、模型眼、<math>\lambda</math>角)</li> <li>● 第11回: 屈折・調節の異常 I(近視・遠視の病態)</li> <li>● 第12回: 屈折・調節の異常 II(乱視、老視、調節異常)</li> <li>● 第13回: 屈折・調節の検査(他覚的・自覚的屈折検査)</li> <li>● 第14回: 屈折・調節の矯正と計算式(眼鏡・CL・手術、光学計算の総括)</li> <li>● 第15回: 定期試験</li> </ul>		

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。

講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にくること。

[使用テキスト・参考文献]

『視能矯正学 第3版』(金原出版)

『視能訓練学』(医学書院)

『視能学 第3版』(文光堂)

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:講師作成資料の配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う)

80%・受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 基礎視能矯正学Ⅱ		授業の種類 講義		授業担当者 中嶋 敬
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期		必修・選択 必修
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>科目担当教員は、国立大学病院眼科において13年間視能訓練士勤務および総合病院、眼科医院への外勤11施設の実務経験および、眼鏡店における眼鏡設計・加工業務経験を有している。この経験は、眼科臨床における検査・診断・治療の基礎となるものである。この経験をもとに、視覚障害者への具体的な支援方法や評価技術を実践的に学び、臨床現場で求められる実践的な知識と技術を学生に伝えることで、即戦力となる視能訓練士の育成を目指す。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>基礎視能矯正学Ⅱでは、Ⅰで習得した基礎知識をもとに、視機能異常に対する評価と矯正の理論を学ぶことを目的とする。斜視・弱視・眼球運動障害などの病態を理解し、それぞれに適した検査法や訓練法の選択・実施ができるようになることを目指す。また、視能矯正の臨床的判断力と応用力を高め、患者に対して適切な支援を提供できる視能訓練士としての専門性を育成する。</p>				
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>基礎理論をもとに、視能矯正に関する検査技術と臨床応用力を養う科目。眼位・眼球運動・屈折・調節・視野・色覚などの検査法を学び、斜視や弱視の矯正法、対象別の対応(小児・高齢者・ロービジョン)についても理解を深める。症例検討や倫理教育を通じて、実践的な視能訓練士としての力を育成する。</p> <p>「異常への対応と矯正」</p>				
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基礎理論を踏まえ、各種視能検査(眼位・眼球運動・屈折・調節・視野・色覚)を理解し、実施できる</li> <li>・ 斜視・弱視の矯正法(プリズム処方・遮蔽訓練など)を理解し、適応判断ができる</li> <li>・ 小児・高齢者・ロービジョン患者など、対象別の視能矯正の特徴を理解する</li> <li>・ ケーススタディを通じて、視能矯正の臨床的思考力を養う</li> <li>・ 患者対応における倫理観とコミュニケーション力を身につける</li> <li>・ 実践的な視能矯正技術を習得し、臨床現場での即戦力となる準備ができる</li> <li>・ 視能訓練士としての専門性と責任感を持ち、チーム医療に貢献できる姿勢を育む</li> </ul>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 前期復習と後期の学習目標</li> <li>2. 眼位検査(カバーテスト・交代遮蔽)</li> <li>3. 眼球運動検査(Hess・Lancaster)</li> <li>4. 屈折検査(レチノスコピー・オートレフ)</li> <li>5. 調節・輻輳検査(AC/A比・近点測定)</li> <li>6. 視野検査(ゴールドマン・自動視野計)</li> <li>7. 色覚検査(石原表・パネルD15)</li> <li>8. 斜視の矯正法(プリズム・手術適応)</li> <li>9. 弱視訓練の実際(遮蔽訓練・視覚刺激)</li> <li>10. ロービジョンケアの基礎</li> <li>11. 小児の視能矯正の特徴と対応</li> <li>12. 高齢者の視能矯正と加齢変化</li> <li>13. 視能訓練士の職業倫理と患者対応</li> <li>14. ケーススタディ:症例から学ぶ視能矯正</li> <li>15. 講義のまとめと解説</li> </ol>				

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。

講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

[使用テキスト・参考文献]

『視能矯正学 第3版』(金原出版)

『視能訓練学』(医学書院)

『斜視・弱視 黄金マニュアル』(眼科ケアシリーズ)

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う)

80%・受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生理光学 I		授業の種類 講義		授業担当者 塚田 貴大	
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 1年 前期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>科目担当教員は国立大学病院眼科における13年間の視能訓練士勤務および総合病院、眼科医院への外勤11施設の実務経験および眼鏡店における眼鏡設計・加工業務経験を有している。光学的知識は眼科臨床における検査・診断・治療の基礎となるものである。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>診断に繋がる検査を実践するための眼光学の基本的知識を習得し、臨床の場において応用できる事を目的とする。</p>					
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>幾何光学における光の性質を理解し、レンズ光学および眼光学の基礎を学ぶ。</p>					
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幾何光学における光の性質を説明できるようになる。</li> <li>・レンズ光学の基本的事項を説明できるようになる。</li> <li>・眼光学の基本的数値を説明できるようになる。</li> </ul>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視力概論:視力の定義と種類・検査方法を概説する。</li> <li>2. 光の性質:幾何光学・物理光学の基礎を解説する。</li> <li>3. 反射・屈折:反射の法則・屈折の法則、凹面鏡、凸面鏡の作図を解説する。</li> <li>4. レンズの仕組みと働き:レンズ光学の基礎、焦点・節点・実像および虚像について解説する。</li> <li>5. レンズの式と倍率:レンズ通過後の光のVergenceについて解説する。</li> <li>6. レンズの式と倍率:倍率、厚レンズの主要点について解説する。</li> <li>7. 光の分散・色覚:プリズムによる光の分散、色覚の基礎を概説する。</li> <li>8. 光覚:照度・光束・光度の概要、明暗順応および皮脂感度について解説する。</li> <li>9. レンズの種類:球面・円柱・トーリック・メニスカスレンズについて解説する。</li> <li>10. レンズの種類:Power Cross(十字式)、ガラス・プラスチック・高屈折レンズについて解説する。</li> <li>11. 模型眼:眼球工学系の数値と角度、Purkinje-sanson像、入射瞳について解説する。</li> <li>12. 屈折異常とその矯正:屈折異常の定義、遠視・近視・乱視の分類について解説する。</li> <li>13. 屈折異常とその矯正:屈折異常の検査法と結果の読み方、不同視・不正乱視について解説する。</li> <li>14. 前期の復習:前期で取り扱った生理光学分野の国家試験問題の解答と解説。</li> <li>15. 講義のまとめと解説</li> </ol>					
<p>[履修に当たっての留意点]</p> <p>数学・物理学の復習は必要となります。計算に苦手意識のある人も多いと思いますが、反復して問題を解くことで克服できます。国家試験のみならず臨床で使用する計算もあるので、予習復習を怠らず確実に習得してください。</p>					
[使用テキスト・参考文献] 講義プリント			[単位認定の方法及び基準] 出席が既定日数を満たす者に単位認定試験を行い、60点以上を合格とします。再試験・追試験を行うことがあります。		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生理光学 II		授業の種類 講義		授業担当者 塚田 貴大	
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(2)	配当学科・学年・時期 1年 後期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）          科目担当教員は国立大学病院眼科における13年間の視能訓練士勤務および総合病院、眼科医院への外勤11施設の実務経験および眼鏡店における眼鏡設計・加工業務経験を有している。光学的知識は眼科臨床における検査・診断・治療の基礎となるものである。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]          診断に繋がる検査を実践するための眼光学の基本的知識を習得し、臨床の場において応用できる事を目的とする。</p> <p>[授業全体の内容の概要]          幾何光学における光の性質を理解し、レンズ光学および眼光学の基礎を学ぶ。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]          ・幾何光学における光の性質を説明できるようになる。          ・レンズ光学の基本的事項を説明できるようになる。          ・眼光学の基本的数値を説明できるようになる。</p>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 屈折異常とその矯正: レンズ収差・主点屈折力・涙液レンズ・頂点間距離補正について解説する。</li> <li>2. 調節: 調節力・老視・調節の計算、焦点深度について解説する。</li> <li>3. 調節: 調節の計算、国家試験過去問の解答と解説。</li> <li>4. みかけの調節力: Purkinje-Sanson image、みかけの調節力について解説する。</li> <li>5. 網膜像の拡大: 眼鏡倍率・相対眼鏡倍率、不等像視について解説する。</li> <li>6. 他覚的屈折検査: 検影法、オートレフラクトメータ、角膜曲率半径について解説する。</li> <li>7. プリズム: プリズムの配置、積み重ね、合成について解説する。</li> <li>8. プリズム: レンズの偏心、Prenticeの法則、プリズムの計算について解説する。</li> <li>9. コンタクトレンズ: 眼鏡とCL、CLの分類について解説する。</li> <li>10. 眼内レンズ: 無水晶体眼、眼内レンズの度数計算について解説する。</li> <li>11. 屈折矯正手術: 角膜、水晶体、強膜に対する術式の概要を解説する。</li> <li>12. 総復習: 眼球光学の総復習</li> <li>13. 総復習: 屈折・調節の検査・矯正・計算</li> <li>14. 総復習: 屈折・調節の検査・矯正・計算</li> <li>15. 講義のまとめと解説</li> </ol>					
<p>[履修に当たっての留意点]          数学・物理学の復習は必要となります。計算に苦手意識のある人も多いと思いますが、反復して問題を解くことで克服できます。国家試験のみならず臨床で使用する計算もあるので、予習復習を怠らず確実に習得してください。</p>					
<p>[使用テキスト・参考文献]          講義プリント</p>			<p>[単位認定の方法及び基準]          出席が既定日数を満たす者に単位認定試験を行い、60点以上を合格とします。再試験・追試験を行うことがあります。</p>		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 屈折矯正学 I	授業の種類 講義	授業担当者 中嶋 敬	
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・後期	必修・選択 必修
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>科目担当教員は、眼科において10年以上実務経験しており、この経験は、眼科臨床における検査・診断・治療の基礎となるものである。この経験をもとに、視覚障害者への具体的な支援方法や評価技術を実践的に学び、臨床現場で求められる実践的な知識と技術を学生に伝えることで、即戦力となる視能訓練士の育成を目指す。</p>			
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <p>屈折異常の原理、検査法、矯正法について理論と実技の両面から学び、視能訓練士として必要な知識と技能を習得する。眼鏡・コンタクトレンズ処方基礎、調節・輻輳との関係、屈折矯正の臨床応用までを学ぶ。</p>			
<p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>屈折矯正学は、視能訓練士が患者の視力を正しく評価し、最適な矯正方法を提供するための基礎科目である。理論と実技を通じて、屈折異常の理解と矯正技術を身につけることが目的であり、視能訓練士として、正確な屈折検査と矯正方法を理解・習得する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 屈折異常(近視・遠視・乱視・老視)の種類と原因</li> <li>・ 屈折検査の理論と技術(オートレフ、レチノスコピーなど)</li> <li>・ 矯正手段(眼鏡・コンタクトレンズ・プリズムレンズなど)の選定と適応</li> <li>・ 調節・輻輳機能との関連</li> <li>・ 実習を通じた検査手順の習得と評価方法の理解</li> </ul>			
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 屈折異常の種類と原因を説明できる</li> <li>2. 屈折検査の手順と注意点を理解し、実施できる</li> <li>3. 屈折矯正の方法(眼鏡・CL)を選択・提案できる</li> <li>4. 調節・輻輳との関連を理解し、臨床に応用できる</li> </ol>			
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション(屈折矯正学の役割と視能訓練士の職務)</li> <li>2. 屈折の基礎理論①: 光学と眼球(屈折力、眼球光学、焦点距離)</li> <li>3. 屈折の基礎理論②: 正視と屈折異常(近視、遠視、乱視、不同視)</li> <li>4. 屈折異常の分類と原因(軸性・屈折性、遺伝・環境要因)</li> <li>5. 屈折検査の概要と準備(検査環境、問診、前処置)</li> <li>6. 視力検査の理論と実技(視力表、裸眼・矯正視力)</li> <li>7. オートレフラクトメーターの使い方(機器操作、測定原理)</li> <li>8. レチノスコピー①: 原理と準備(ストリークレチノスコピー)</li> <li>9. レチノスコピー②: 実技演習(演習、反射像の読み取り)</li> <li>10. 主観的屈折検査①: フォロプター(フォロプターの操作方法)</li> <li>11. 主観的屈折検査②: クロスシリンダー(乱視軸の決定)</li> <li>12. 主観的屈折検査③: バランス法(両眼バランス、調節制御)</li> </ol>			

13. 調節と輻輳の生理(調節力、AC/A比、輻輳近点)

14. 調節異常と屈折矯正(調節緊張、調節不足)

15. 講義のまとめと解説

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。

講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

[使用テキスト・参考文献]

『視能訓練士のための屈折矯正学』『眼科学』日本眼科学会編

各種検査機器マニュアル

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:スライドプリントを配布

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。

定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う)

80%・受講態度および提出物の状況 20%

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 生理光学 I【演習】		授業の種類 演習		授業担当者 塚田 中嶋
授業の回数 15	時間数(単位数) 30(1)	配当学科・学年・時期 1年後期	必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性）          科目担当教員は国立大学病院眼科における13年間の視能訓練士勤務および総合病院、眼科医院への外勤11施設の実務経験および眼鏡店における眼鏡設計・加工業務経験を有している。光学的知識は眼科臨床における検査・診断・治療の基礎となるものである。</p>				
<p>[授業の目的・ねらい]          診断に繋がる検査を実践するための屈折検査の基本的知識・技術を習得し、臨床の場において応用できる事を目的とする。</p>				
<p>[授業全体の内容の概要]          他覚的・自覚的屈折検査の基礎を学び、屈折異常とその矯正方法について学習する。</p>				
<p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]          ・他覚的屈折検査の手技・結果を理解し、臨床における屈折検査、視力検査に応用できるようになる。          ・自覚的屈折検査の手技・結果を理解し、臨床における屈折検査、視力検査に応用できるようになる。</p>				
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>コマ数</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 他覚的屈折検査:ケラトメータ、オートレフラクトメータ、プラチドー角膜計について概説する。</li> <li>2. 他覚的屈折検査:ケラトメータ、オートレフラクトメータ、プラチドー角膜計の実践。</li> <li>3. 他覚的屈折検査:検影法の測定原理と検査手技について解説する。</li> <li>4. 他覚的屈折検査:検影法の実践。</li> <li>5. 他覚的屈折検査:検影法の実践。</li> <li>6. 自覚的屈折検査:乱視表の測定原理と検査手技について概説する。</li> <li>7. 自覚的屈折検査:乱視表の実践。</li> <li>8. 自覚的屈折検査:乱視表の実践。</li> <li>9. 自覚的屈折検査:クロスシリンダーの測定原理と検査手技について概説する。</li> <li>10. 自覚的屈折検査:クロスシリンダーの実践。</li> <li>11. 自覚的屈折検査:クロスシリンダーの実践。</li> <li>12. 過矯正と低矯正:両眼開放屈折検査およびR&amp;G検査について概説する。</li> <li>13. 小児の視力検査:小児の屈折検査の測定原理と検査手技の解説と実践。</li> <li>14. 近見視力検査:近見視力検査の測定原理と検査手技の解説と実践。</li> <li>15. 単位認定試験</li> </ol>				
<p>[履修に当たっての留意点]          視能訓練士が眼科臨床で最も高頻度に携わる屈折検査の基礎を学びます。手技だけでなく理論に基づいた検査を施行できるよう、講義時間のみでなく空き時間を用いて練習を重ねるようにしましょう。</p>				
[使用テキスト・参考文献] 講義プリント		[単位認定の方法及び基準] 出席が既定日数を満たす者に単位認定試験を行い、60点以上を合格とします。再試験・追試験を行うことがあります。		

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 視能検査学 I	授業の種類 講義	授業担当者 中嶋 敬
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・前期
		必修・選択 必修
実務経験のある教員による授業科目（実務経験の概要と授業との関連性） 本科目の担当教員は、病院の眼科に10年以上勤務し、現在も眼科クリニックにて継続して臨床業務に従事している。長年にわたる視能訓練士としての実務経験を通じて、視力・屈折・眼位・視野・色覚などの検査に加え、患者対応や多職種連携の実践的知識を有している。この経験を活かし、授業では検査の理論だけでなく、実際の臨床現場での検査手技・注意点・症例への対応方法などを具体的に指導することができる。学生は、教科書では得られない現場感覚や応用力を学ぶことができ、将来の臨床実践に直結する教育効果を得ることができる。		
[授業の目的・ねらい] ・視力・屈折・眼位・両眼視・視野・色覚などの、主要な視能検査に関する基礎的な知識と理論を体系的に学ぶことで、視能訓練士としての専門性を高める。 ・多様な検査法の目的・手順・評価方法を理解し、対象者に応じた適切な検査選択ができるようになる。 ・臨床現場で求められる倫理観、安全管理、コミュニケーション力を身につけ、チーム医療の一員としての自覚を持つ。 ・検査機器の操作技術を習得し、正確な検査結果を得るための技能を身につける。 ・検査結果を適切に評価・解釈し、医師や他職種と連携して報告・助言ができる能力を養う。 ・小児や高齢者など多様な対象者に対して、柔軟かつ倫理的に対応できる。		
[授業全体の内容の概要] 視能訓練士が行う眼科一般検査の理論的背景や目的について学ぶ。視力、屈折、眼位、眼球運動、視野、色覚などの検査項目を対象に、検査の原理・測定方法・評価基準を体系的に理解する。臨床での検査選択や結果の解釈に必要な基礎知識と判断力を養う内容。		
[授業修了時の達成課題(到達目標)] 1. 視能検査の基礎理論を理解する 2. 検査機器の構造と操作方法を習得する 3. 検査結果の評価と解釈ができる。 4. 対象者に応じた検査の工夫ができる 5. 倫理的配慮と安全管理を実践できる 6. チーム医療の一員としての役割を理解する		
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. オリエンテーションと視能検査学の概要 ・ 視能訓練士の役割と視能検査の意義 ・ 視能検査の分類と目的 ・ 授業の進め方と評価方法 2. 視覚の基礎解剖と生理 ・ 眼球の構造と機能 ・ 網膜・視神経・視路の解剖 ・ 視覚情報処理の流れ 3. 視力検査の理論と方法 ・ 視力の定義と種類(遠見・近見) ・ 視力表の種類(ランドルト環、スネレン表など) ・ 視力測定の手順と注意点 4. 屈折異常とその検査 ・ 近視・遠視・乱視・不同視の理解 ・ 屈折検査の種類(オートレフ、レチノスコープ)		

- ・ 主観的屈折検査の流れ5. 調節と輻輳の検査
- ・ 調節力と調節幅の測定
- ・ 輻輳力の評価方法
- ・ 調節・輻輳異常の臨床的意義第6回:眼位と眼球運動の検査
- 6. 眼位と眼球運動の検査
  - ・ 正常眼位と異常眼位(斜視・斜位)
  - ・ カバーテスト・交代カバーテスト
  - ・ ヘスチャート・眼球運動検査
- 7. 両眼視機能の検査
  - ・ 立体視・融像・抑制の理解
  - ・ ステレオテスト(Titmus、Randotなど)
  - ・ ワース4灯検査・バゴリーニ線条レンズ
- 8. 視野検査の基礎
  - ・ 視野の定義と正常範囲
  - ・ 視野異常の種類と原因
  - ・ 視野検査の種類(手動・自動)
- 9. 自動視野計の使用法
  - ・ ハンプリー視野計の操作と解析
  - ・ ゴールドマン視野計との比較
  - ・ 臨床例の読み取りと評価
- 10. 色覚検査
  - ・ 色覚の生理と異常(先天性・後天性)
  - ・ 色覚検査の種類(石原表、パネルD-15)
  - ・ 色覚異常の社会的影響と対応
- 11. 眼電図・視覚誘発電位(VEP)
  - ・ 電気生理学的検査の概要
  - ・ VEPの測定方法と臨床応用
  - ・ 網膜疾患・視神経疾患との関連
- 12. 小児・高齢者への視能検査
  - ・ 小児の視能検査の工夫と注意点
  - ・ 高齢者の視機能変化と対応
  - ・ コミュニケーション技術の重要性
- 13. 視能検査における倫理と安全管理
  - ・ インフォームドコンセント
  - ・ 検査中の安全配慮
  - ・ 個人情報と記録管理
- 14. 臨床実例から学ぶ視能検査
  - ・ 症例ベースの検査選択と評価
  - ・ 検査結果の解釈と報告書作成
  - ・ チーム医療における視能訓練士の役割
- 15. 講義のまとめと解説

[履修に当たっての留意点]  
 復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。  
 講義中:分からないことは、授業中に質問をするか、その日のうちに確認にくること。

<p>[使用テキスト・参考文献]          視能学エキスパート『視能検査学 第2版』医学書院          『視能訓練学総論』医学書院          『眼科学』文光堂、南江堂          使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)          副教材:スライドプリントを配布</p>	<p>[単位認定の方法及び基準]          評価を受けるには、前授業回数の3分の2以上の出席が必要。          定期テスト(選択式、記述式を複合したテストを行う) 80%          ・受講態度および提出物の状況 20%</p>
---	---

# 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 視覚リハビリテーション	授業の種類 講義	授業担当者 當摩 智
授業の回数 15回	時間数(単位数) 30時間(2単位)	配当学科・学年・時期 1年・前期
必修・選択 必修		
実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性) 担当教員は、眼科において10年以上の臨床経験を有し、多様な症例に対する検査・訓練等の支援を実践してきた。また、教育経験も豊富であり、学生指導や演習授業の設計にも精通している。 本授業「視覚リハビリテーション」は、眼科医療機関において長年にわたりロービジョン患者への支援に従事し、視覚補助具の選定・指導、日常生活動作の訓練、福祉制度との連携など、幅広い実務経験を積んできた。この現場経験をもとに、視覚障害者への具体的な支援方法や評価技術を実践的に学ぶ。臨床現場で求められる実践的な知識と技術を学生に伝えることで、即戦力となる視能訓練士の育成を目指す。		
[授業の目的・ねらい] 視覚リハビリテーションの授業では、視覚障害者になぜなってしまうのかを眼科学全般から基礎を学び、視能訓練士として最終的に適切な治療・訓練が行える知識の土台を形成することを目的としている。ロービジョンケアや補助具の指導、環境調整などを2年次に学修するための知識を育成する。		
[授業全体の内容の概要] 最終的に視覚障害者に必要な支援ができるよう、眼科学全般から知識を習得する。多職種連携や福祉制度の理解も含め、視能訓練士として総合的な支援ができる土台を形成する。視能訓練士として必要な他職種との連携や福祉制度の理解を通じて、包括的で実践的な視覚リハビリテーションを行うための知識を身につける。		
[授業修了時の達成課題(到達目標)] 1. 正常とは何かを学ぶ 2. 晴眼者と視覚障害者の差異を学ぶ 3. 解剖、機能、検査、疾患の関連性と治療、訓練に向けての考察をグループで行ってみる 4. 他職種連携や福祉制度の基礎を学び、眼科医療システムの基礎知識を身につける		
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 I <解剖生理学基礎理解> 1. 解剖生理の確認と学ぶ目的① 2. 解剖生理の確認と学ぶ目的② 3. 解剖生理の確認と学ぶ目的③ 4. 解剖生理の確認と学ぶ目的④ 5. 生理光学基礎① 6. 生理光学基礎② 7. 生理光学基礎③ 8. 生理光学基礎④ 9. 生理光学基礎⑤ 10. 生理光学基礎⑥ 11. 眼疾病学基礎① 12. 眼疾病学基礎②		

Ⅲ<応用と実践演習>

13. 眼科診療システムと多職種連携および福祉制度の基礎 1

14. 眼科診療システムと多職種連携および福祉制度の基礎 2

15. まとめ

[履修に当たっての留意点]

復習:授業で配布した資料の管理を確実にする。配布資料と自身のノートの内容の確認を行う。  
演習を行っていて、分からないことは授業中に質問をするか、その日のうちに確認にいくこと。

[使用テキスト・参考文献]

『イラスト眼科』第8版 (文光堂)

『視能学 3版』(文光堂)

使用器材等:プロジェクター(視覚教材スライド講義)

副教材:スライドプリントを配布(PDF)

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、授業回数の3分の2以上の出席が必要。

筆記試験 70%、小テスト 10%×3

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名) 実習指導 I		授業の種類 実習		授業担当者 當摩 智・中嶋 敬・清水 昌美	
授業の回数 27回	時間数(単位数) 40時間(1単位)	配当学科・学年・時期 1年 後期		必修・選択 必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>担当教員は、病院の眼科に10年以上勤務し、現在も眼科クリニックにて継続して臨床業務に従事している。長年にわたる視能訓練士としての実務経験を通じて、視力・屈折・眼位・視野・色覚などの検査に加え、患者対応や多職種連携の実践的知識を有している。</p> <p>この経験を活かし、授業では検査の理論だけでなく、実際の臨床現場での検査手技・注意点・症例への対応方法などを具体的に指導することができる。学生は、教科書では得られない現場感覚や応用力を学ぶことができ、将来の臨床実践に直結する教育効果を得ることができる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 臨地実習に必要な知識・技能・態度の習得</li> <li>・ 医療人としての倫理観と安全意識の育成</li> </ul> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>1年次では、視能訓練士としての基礎的な知識と態度の形成を目的とし、医療倫理、職業倫理、コミュニケーション技法、視能検査の基礎講義および簡易的な模擬検査演習を中心に構成する。また、医療安全や感染対策についても初歩的な理解を促す。</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 医療人としての基本的態度を理解し、実践できる。</li> <li>・ 患者との基本的なコミュニケーションが取れる。</li> <li>・ 視能検査の基礎知識を理解し、簡易的な検査手順を体験できる。</li> <li>・ 実習に対する意欲と責任感を持つ。</li> </ul>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>1年次(導入期)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 視能訓練士の役割と臨地実習の概要、臨地実習のルールとマナー</li> <li>2. 実習施設の特徴と対象者の理解、実習中のトラブル対応とリスク管理</li> <li>3. 小児の対応方法と基礎理解</li> <li>4. 高齢者への接し方と配慮事項</li> <li>5. 障害者への接し方と配慮事項</li> <li>6. 必要書類の準備、作成、指導①</li> <li>7. 必要書類の準備、作成、指導②</li> <li>8. 必要書類の準備、作成、指導③</li> <li>9. 医療倫理・職業倫理(医療倫理と患者対応の基礎)</li> <li>10. コミュニケーション演習</li> <li>11. 視能検査の基礎講義</li> <li>12. 模擬検査体験①</li> <li>13. 模擬検査体験②</li> </ol>					

14. 医療安全・感染対策
15. 模擬患者対応(ロールプレイ)
16. お礼状の作成
17. 実習内容の振り返りと課題整理
18. 実習成果のまとめと発表準備
19. 実習成果発表(プレゼンテーション)
20. 実習評価とフィードバック①
21. 実習評価とフィードバック②
22. ケーススタディ
23. グループディスカッション
24. 実習評価(技術・態度・記録)
25. 実習評価とフィードバック
26. 臨地実習への準備
27. 総括と今後の課題設定

[履修に当たっての留意点]

- ・実習指導の内容にしたがう
- ・指示された書類を確実に準備をし、提出をする
- ・臨地実習要項に記載されている留意点を守ること

[使用テキスト・参考文献]

『視能訓練学』第2版 (医学書院)  
「視能学 3版」(文光堂) ほか

[単位認定の方法及び基準]

- ・評価を受けるには、評価を受けるには、全授業回数の3分の2以上の出席が必要。
- ・実習に関する書類の提出の確実さ
- ・細菌検査等の提出の確実さ
- ・評価:筆記試験・実技試験・レポート・振り返り
- ・実習後のプレゼンテーションや振り返りへの姿勢

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名)		授業の種類		授業担当者	
臨地実習 I - 1 (幼稚園・保育所)		実習		當摩 中嶋 清水	
実習の日数	時間数(単位数)	配当学科・学年・時期		必修・選択	
1日8時間 10日間	80時間(2単位)	1年・後期		必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>保育士や幼稚園教諭は実務経験により、日々の保育・教育活動を通じて、子どもの発達理解、保護者対応、環境構成、行事運営など多岐にわたる実践力を備えている。学生が実習で学ぶ内容(保育計画の立案、子どもとの関わり方、観察・記録、保育者の役割理解など)は、その経験の中に含まれており、現場で培った知識と技術を具体的に指導できる点で、教育的価値を得ることができる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・将来的に小児眼科や学校検診などに関わる際の基盤づくりとなる重要な実習であることを理解する</li> <li>・小児の発達段階や行動特性を理解し、視能訓練士としての小児対応力の基礎を育成する</li> <li>・子どもとの自然な関わりを通じて、検査時のコミュニケーション技術や観察力を高める</li> <li>・保育・教育現場の支援体制を理解し、医療・福祉・教育の連携の重要性を学ぶ</li> </ul> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <p>将来的に小児眼科や学校検診、ロービジョン児支援などに関わる際の「人と関わる力」の土台づくりになる</p> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 小児の発達特性を理解し、視能検査や訓練に活かせる観察力を身につける</li> <li>2. 子どもとの適切な関わり方や声かけができる</li> <li>3. 保育・教育現場の支援体制を理解し、視能訓練士としての役割を考察できる</li> <li>4. 実習記録を通じて、自身の対応力と課題を振り返ることができる</li> </ol>					
<p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>&lt;実習期間&gt;</p> <p>80時間(10日間×8時間)</p> <p>&lt;実習内容&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 子どもとの発達観察(約20時間) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年齢別の発達段階(身体・認知・言語・社会性)の観察</li> <li>・ 視覚行動(注視・追視・空間認識など)の確認</li> <li>・ 集団活動・遊びの中での視覚的反応の記録</li> <li>・ 発達の個人差や特性への理解</li> </ul> </li> <li>2. 子どもとの関わり体験(約20時間) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自由遊び・絵本・制作活動などへの参加</li> <li>・ 子どもとの自然なコミュニケーション(声かけ・表情・距離感)</li> <li>・ 視覚的な配慮が必要な場面での対応(まぶしさ・見えにくさなど)</li> <li>・ 保育士の関わり方の観察と学習</li> </ul> </li> <li>3. 保育・教育環境の理解(約15時間) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 保育室・遊具・教材などの視覚的環境の確認</li> <li>・ 安全管理・動線・照明・色使いなどの視覚支援の工夫</li> </ul> </li> </ol>					

- ・ 保育所・幼稚園の支援体制(個別支援・連携)の理解
4. 視覚支援の視点からの考察(約15時間)
- ・ 視覚障害児への配慮の実例(遮光眼鏡・拡大教材など)の見学
  - ・ 保育士・教諭との意見交換(視覚的困難への対応)
  - ・ 医療・福祉・教育の連携の重要性についての考察
  - ・ 視能訓練士として関わる可能性の理解
5. 実習記録・振り返り(約10時間)
- ・ 実習日誌の記録(観察・気づき・対応の工夫)
  - ・ 実習報告書の作成(発達理解・支援の視点・今後の課題)
  - ・ 指導教員との振り返り面談・自己評価

[履修に当たっての留意点]

- ・ 実習指導の内容にしたがう
- ・ 臨地実習要項に記載されている留意点を守ること

[使用テキスト・参考文献]

『視能訓練学』第2版 (医学書院)  
「視能学 3版」(文光堂) ほか

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、出席時間数が臨地実習時間数の5分の4以上に達していることが必要。

- ・ 実習施設からの評価表
- ・ 実習日誌・症例レポート
- ・ 指導者による技術・態度評価・総合評価
- ・ 実習後のプレゼンテーションや振り返り

## 授 業 概 要

授業のタイトル(教科名)		授業の種類		授業担当者	
臨地実習 I - 2(特養・老健・障支)		実習		當摩 中嶋 清水	
実習の日数	時間数(単位数)	配当学科・学年・時期		必修・選択	
1日8時間 10日間	80時間(2単位)	1年・後期		必修	
<p>実務経験のある教員による授業科目 (実務経験の概要と授業との関連性)</p> <p>実習施設の介護福祉士が5年以上の実務経験を持つ場合、日常の介護業務だけでなく、利用者の個別支援、家族との連携、チームケア、緊急対応など多様な場面を経験している。学生が実習で学ぶ内容(基本的な介護技術、コミュニケーション、記録の取り方、倫理的配慮など)は、その実務の中に含まれており、現場で培った実践的な知識と判断力を直接伝えることができる点で、教育的価値が得られる。</p>					
<p>[授業の目的・ねらい]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者の身体的・認知的特性を理解し、視能訓練士としての対応力の基礎を育成する</li> <li>・ 高齢者とのコミュニケーションを通じて、検査時の配慮や接遇の重要性を体験的に学ぶ</li> <li>・ 医療・介護・福祉の連携現場を理解し、視能訓練士の役割を広い視点で捉える</li> <li>・ 高齢者の生活環境や視覚的課題に対する支援のあり方を考察する</li> </ul> <p>[授業全体の内容の概要]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 将来的に高齢者眼科やロービジョンケアに関わる際の「人に寄り添う力」を育てる大切な実習である。</li> <li>・ 高齢者の生活環境や身体・認知の特性を理解し、視能訓練士としての高齢者対応力の基礎を育てる。</li> <li>・ 特別養護老人ホームや介護老人保健施設などでの体験を通じて、検査時の配慮・接遇・視覚支援の視点を学ぶ。</li> <li>・ 日常生活の観察、コミュニケーションの実践、視覚的困難への理解、介護職員との連携などを通じて医療・福祉・介護のつながりを体感し、将来のロービジョンケアや高齢者眼科への関わりに備える。</li> </ul> <p>[授業修了時の達成課題(到達目標)]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高齢者の身体的・認知的特性を理解し、検査や支援に活かせる観察力を身につける</li> <li>2. 高齢者との適切な関わり方や配慮ある対応ができる</li> <li>3. 視覚的困難に対する支援の工夫を理解し、視能訓練士としての視点を持つ</li> <li>4. 医療・介護・福祉の連携の重要性を理解し、チームの一員としての意識を育てる</li> <li>5. 実習記録を通じて、自身の課題と成長を振り返ることができる</li> </ol> <p>[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]</p> <p>&lt;実習期間&gt;</p> <p>80時間(10日間×8時間)</p> <p>&lt;実習内容&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 高齢者の生活・行動の観察(約20時間) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 食事・入浴・移動・レクリエーションなどの日常生活の見学</li> <li>・ 加齢による身体機能・認知機能の変化の理解</li> <li>・ 視覚的困難(見えにくさ・まぶしさ・空間認識など)の観察</li> </ul> </li> <li>2. 高齢者との関わり体験(約20時間) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 声かけ・会話・誘導などのコミュニケーション技術の実践</li> <li>・ 認知症高齢者への対応の工夫(安心感・繰り返し・ゆっくりした説明)</li> <li>・ 集団活動への参加と視覚的支援の工夫(色使い・配置・照明など)</li> </ul> </li> </ol>					

3. 視覚支援の理解と考察(約20時間)

- ・ ロービジョン高齢者への支援(遮光眼鏡・拡大鏡・環境調整など)の見学
- ・ 介護職員との情報共有・支援方法の学習
- ・ 高齢者施設における視能訓練士の関わり方の考察

4. 実習記録・振り返り(約20時間)

- ・ 実習日誌の記録(観察・気づき・対応の工夫)
- ・ 実習報告書の作成(高齢者理解・支援の視点・今後の課題)
- ・ 指導教員との面談・自己評価

[履修に当たっての留意点]

- ・ 実習指導の内容にしたがう
- ・ 臨地実習要項に記載されている留意点を守ること

[使用テキスト・参考文献]

『視能訓練学』第2版 (医学書院)  
「視能学 3版」(文光堂) ほか

[単位認定の方法及び基準]

評価を受けるには、出席時間数が臨地実習時間数の5分の4以上に達していることが必要。

- ・ 実習施設からの評価表
- ・ 実習日誌・症例レポート
- ・ 指導者による技術・態度評価・総合評価
- ・ 実習後のプレゼンテーションや振り返り